『贋作・蟹工船』
作・玉井秀和

客電がゆっくり落ちていって、暗闇。

１場　宇宙　月　死者の地　死者との対話

曲が入ってくる。
ぼんやり炭山が見える。
キューブは墓地のように置かれている。
炭山が倒れている。
人類の進化を身体表現。
音響のノイズが入る。

炭山「ヒューストン、ヒューストン。聞こえますか」

炭山「ヒューストン、ヒューストン。こちらアポロ１１号。聞こえますか」

炭山「ヒューストン、ヒューストン。応答ねがいます」

ノイズ
死者との通信

炭山「ヒューストン。ヒューストン。聞こえますか？」
白兎「はい。こちら、ヒューストン」
炭山「ヒューストン。こちらアポロ１１号。聞こえていますか？」
白兎「こちらヒューストン。アポロ１１号。聞こえていますよ？」
炭山「こちらアポロ１１号。神無月の２０日、午前５時１７分、表面温度摂氏20度、大気圧10^{-9}Pa、予測値通り、異常ありません。月への着陸に成功しました。僕は今、月にいます」
白兎「こちらヒューストン。アポロ１１号おめでとう。月の感触はどうですか？」
炭山「こちらアポロ１１号。月は少しやわらかく、平原のようです」
白兎「アポロ１１号。（そこには）何が見えますか？」私たちが残した世界はどうですか？
炭山「ヒューストン。兎が見えます。地平線まで広がる大平原の向こうに、白い兎が飛び跳ねています！」とても美しいです。
月は「夢」の象徴であり、兎は「愛」の象徴である。

音楽（激しい。壮大。鎮魂歌。青。白。美しい。光。空飛んでる）

そこは月。みんな、重力が弱い。スローで動く。（みんなは客席横からでてくる）
白兎、ゆっくりと降りてくる。
炭山と白兎が向かい合い、炭山は白兎に手を差し伸べて、投げる。向かい合ったまま、遠ざかっていく。死者との別れ。
スケベエが「バシン」とキューブを地面に叩きつけて転換（カット）

２場　港　出航前

船員たちが労働している。キューブを運んだり。
イントレを舞台中央まで動かす。

白兎「この赤い腹をした、年寄クジラのような船に何百人もの男の人たちが乗っていく。この年寄クジラは、この港を出て北に向かい、カムチャッカの海で蟹をとるために黒い煙を吐いて泳いでいく。脇腹にはいくつもの小魚のような川崎船を抱え、この川崎船で蟹を取る。一匹の蟹からほーんの僅かにしかとれない成分、通称「蟹油」を精製して、月まで向かうロケットの燃料を作っている。今、日本は「かぐや計画」という月に向かう計画を着々と勧めており、その最も重要なのが、この「蟹油」だ。日本が月に行くためには、この船の「蟹油」が必要なんだって。この船に乗ってたら月に行かしてくれるって監督の浅川さんが言ってた。かくいう私もそれを聞いてこの船に乗ってるんだ。月にはなにか、人をひきつける魔力でもあるのかしら」

スケベエ「ちょーっとどいてどいてどいて」
白兎「わわわわわ」
スケベエ「おっ、兎ちゃん。今日もめんこいの」
白兎「あら、スケベエさん。おはようございます！」
スケベエ「おう、おはよう！　んあっそうだ（キューブを置く）。さっき露店で買ったんだで。これ持ってるといいことがあるんだってよ」
白兎「なんですか、それ？」
スケベエ「幸運の石だでよ」一応、宮沢賢治の「蛍の火」みたいな小説の話からとってきてる。
白兎「え、この汚い石がですか？」
スケベエ「んだ。兎ちゃん欲しいか？」
白兎「え、これをですか？」（そういって石を取ろうと）
スケベエ「オーっと。たーだであげるわけにはいかねえ。その代わりといっちゃなんだが、兎ちゃん。おじさんの言うこと聞いてくれるかな」
白兎「えーどうしようかなー」
スケベエ「わりいようにはしねえからさ、兎ちゃん」
白兎「えー？」

困る白兎。

パク「（キューブを置く）おいなにやってんだエロスケベエ！　さっさと行くぞ！」
白兎「パクさん！」（パクの後ろに隠れる）

スケベエ「別に俺は兎ちゃんと喋ってただけだで」
パク「ごめんな兎ちゃん。このバカが」
白兎「いえいえ」
パク「こいつもこう見えて結構いいところもあるからさ、嫌いになんねえでやってくんねえかな」
白兎「はい！　大丈夫ですよ」
スケベエ「なんだなそりゃ」
パク「お前はそうやって女の子に浮かれてっからダメなんだで」
スケベエ「んなことねえで」
パク「そうだろがよ」
スケベエ「んなことねえって言ってるで、このメカブ盆栽」
パク「んだと、発情期ゴリラ」
スケベエ「ゴリラではねえで」
パク「ゴリラみてえなもんだろがよ」
スケベエ「ちげえってったんだろがよ」

喧嘩する
困る、白兎。（ここまでにダンショクがキューブを障害物のように並べておく）

白兎「ちょっとスケベエさん！　パクさん！　ちょっと」
ダンショク「何やってんだおめえら（キューブを置く）」
白兎「ダンショクさん！」
ダンショク「お兎ちゃん。馬鹿がごめんな。やめろ馬鹿！　やめろって」（ここまでパクとスケベエ取っ組み合っている）
スケベエ「パクがゴリラとかいうからだで」
ダンショク「うるせえゴリラ」
ダンショク「それよりなんだおめえ。酒屋にいるって言ったじゃねえか」
スケベエ「それはあれだで。酒買い終わったから海岸歩いとったんだで」
ダンショク「馬鹿かてめえは。酒屋にいるっていったら酒屋にいろが。ブッころすぞ！
パクもどこほっつき歩いてたんだ」
パク「お、おれは無農薬野菜の――」
ダンショク「なに健康に気を使ってんだ、バカ！」
パク「ごめんよう」
ダンショク「おら、もう行かねえと浅川にぶっ殺されるぞ！　ごめんな兎ちゃん。迷惑かけちゃって」
白兎「いえいえ。ありがとうございます。ダンショクさん」
ダンショク「おう。また後でな、兎ちゃん」
白兎「はい！　またあとで」

３人、はける。スケベエ残って。

スケベエ「そだそだ。この石やるでよ」
白兎「え」
スケベエ「べつに遠慮することはねえでよ」
ダンショク声「何やってんだ！　早くしろ！」
スケベエ「ゴメンだで！　んじゃな！」
白兎「あ、はい」

スケベエ、はける。

白兎「彼らが乗り込んだこの船は、蟹工船・博光丸。カムチャッカの海で「蟹油」を作るための船。お金のない人たちが最後の手段に来るところ。私はこの博光丸でお菓子や日常品などの売り子をやっている。これはそんな蟹工船の中でのお話し！」

白兎、はける。（扉）

３場　港　夢
ダンショク→警官　パク、スケベエ、白兎→野次馬１・２・３

キューブが障害物になっていて、その上を飛び越えることができるといい。

警官「ちょっときみ、待ちなさい！」
炭山「待ちなさいったって、待ったら捕まえるんだろうが！」（イントレ下などをくぐりつつ）

警官、イントレをくぐるのに苦労している。

監督「君は背が低くていいなあ！」
炭山「うるせえ！」
警官「そっちは港じゃない！」
炭山「んじゃ、港はどっちだ！」

炭山、警官から逃げて高い所へ。（イントレ中央奥）

警官「君！　危ないからそこから降りなさい！　君は完全に包囲されている。直ちにそこから降りなさい（いろんな理由をつけて「包囲」という言葉を言う）」
炭山「包囲されているって言いたいだけだろ」
警官「そ、そんなことはない！」
炭山「お前しかいねえじゃねえか！」
警官「いいから早く降りてきなさい」
炭山「いやだね。蟹工船にのせてくれるまでおれはここを離れない！」
警官「君！」（近づく）
炭山「おおっとそれ以上近づくんじゃねえ！（発砲）　それ以上近づいたらこの大衆の面前で飛び降りてやるぞ！」

警官「それは脅しになっているのか！」
炭山「うるせえ！」
野次馬３「なあにあれ？」
野次馬１「なんだろう？　自殺かなあ？」
野次馬３「えーいやだあ」
野次馬１「うーん。大丈夫だよーさとみぃ。よしよしよし」
野次馬３「みちおー」
（カップル、とんでもないイチャつきを始める）
炭山「なんだてめえら見せもんじゃねえぞ！　ばーか。アホ。ブス。ブス・オブ・ブス。ブスキングダム。（野次馬反応）俺は蟹工船で「蟹油」を作ったら、月にいかしてくれると聞いた！　いいから蟹工船の責任者を連れてきやがれ！」
警官「わかったからとりあえず降りてきなさい！」
炭山「だったらさっさと責任者連れてきやがれ、ハゲ野郎！」
警官「ハゲではない」
野次馬２「なにがあったんですかな」
野次馬３「それがあ、人がなんかあ、飛び降りるとかおりないとかでえ」
野次馬１「あそこに」
野次馬２「あ！　お前は９年前に死んだ我が息子、トシヒコじゃないか」
炭山「ん？　いや、いや、ちげえちげえ。違うやつだそれは。何モウロクしてやがるんだじじい」
野次馬２「トシヒコ。そこから降りてきなさい。お父さんも一緒に謝ってあげるから」
炭山「いや、誰なんだよテメエ！」

監督、出てくる。客席の角から。

監督「どうしましたかな」
警官「あ、えっと（どちら様で）」
監督「蟹工船、博光丸の責任者・浅川です」
警官「あぁ（よかった）。それが、あそこの若者が船に乗せてくれないとあそこから飛び降りるとかで」
監督「おいきみか！　蟹工船に乗りたいというのは！」
炭山「お前が蟹工船の責任者か！」
監督「そうだ！　博光丸の監督の浅川だ」

炭山、駆け下りてくる。キューブを飛び越えジャンピング土下座。

炭山「お願いします。僕を船にのせてください。この船に乗れば、月に行けると聞きました。僕はどうしても月に行きたいんです！」
警官「やっと降りてきたな！　先ほどのハゲを訂正しても（遮られる）」
監督「私に任せてもらえますか」
警官「はい！」
監督「おい小僧、ただ船にのっとれば月に行けるというわけじゃないぞ。カムチャッカで蟹をとるんだ。カムチャッカで蟹をとって月に行くための「蟹油」をつくるんだ。わかってんのか！」
炭山「はい！　なんでもします！」
監督「お前、土の匂いがするな。お前みたいな、土の匂いがするやつができるような仕事じゃない！　家に帰ってろ！」
炭山「（土下座）帰る家はありません！」
監督「なに？」
炭山「父も母も死にました。唯一の身寄りの姉ちゃんとは別れ離れになりました。それから炭鉱で生きてきました。だけど俺は、月に行くという夢を諦めきれないのです！　お願いします！　俺を蟹工船にのせてください！」

やや間。

監督「なんでも、するんだな？」
炭山「はい！　なんでもします！」
監督「その言葉を忘れるなよ。ついてこい！」
炭山「ありがとうございます！」

２人、はける。（扉）扉が閉まる音で転換（フェードかも知れない）。

４場　糞壺

イントレを戻しながら。
スケベエがため息をついている。
イントレが戻し終わったら、回想用の玄関をキューブで作ってる。一個はトマトジュース用。

パク「どしたおめえ。そんなため息ついて」
スケベエ「恋、だな」
パク「あん？」
スケベエ「恋ってのはそれはもう、ため息と涙でできたもんだでよ」
パク「何言ってんだオメエ」

やや間

ダンショク「それにしてもこの部屋はくせえなあ」（イントレの上に上る）
スケベエ「んだな。身体がかいいかいい」
パク「一度土の匂いを嗅いじまうと一層かんじるな」
ダンショク「海の上にいるときは、なれちまってるけどな」
スケベエ「なれたってええことないでよ」
ダンショク「んだな」

パク「ダンショク。おめえそんなに何買ったんだで」
ダンショク「それが母ちゃんの心配性がうつっちまったみてえでよ」
スケベエ「なんだそれ」
ダンショク「家を出てくるときもよう」（この流れで回想へ）

回想

キューブを玄関の椅子みたいな感じにしておく。後でダンショクが座る。

スケベエ→妻、パク2→子供

妻「あなたー、あなたー、あなたどこー」
ダンショク「ん？　なんだ？」（イントレの上から下りてくる）
妻「あら、あなたそんなところにいたの。もう行っちゃったのかと思った」
ダンショク「もう行こうとしてたとこだ」
子供「もういっちゃうの？」
ダンショク「ごめんな。また父ちゃん、稼いでくるからな」
妻「それよりあなた、ストッパ下痢止め入れた？」
ダンショク「んなもんいらんだろ」
妻「何言ってるのいるわよ。もしお腹痛くなったらどうするの。船の上なのよ。もしかしてお布団の上でするの？　そうなったらあなたその日から、おうんちの上で寝ることになるのよ？　いいの？　あなた。おうんちの上で寝ることになるのよ」
ダンショク「トイレがあるじゃろ」
妻「全部使用中だったらどうするのよ」
ダンショク「医務室とかがあるじゃろ」
妻「お医者さんが休憩していなかったらどうするのよ」
ダンショク「どうにかするから大丈夫じゃ」
妻「そう？　じゃあ、トマトジュースは持った？」
ダンショク「なんでもつんじゃ」
妻「だって、栄養が不足したらどうするのよ」
ダンショク「そんときはそんときじゃろ」
妻「だめよ。海の上はビタミン不足になりやすいんだから。そんな危機管理能力じゃすぐカッケになるわよ？　カッケよカッケ。膝がピクンってならなくなるのよ？　だからトマトジュース持っていかないと」
子供「トマトジュースは必要だよ父さん」
ダンショク「トマトジュースはいらんじゃろ」
妻「あなた」
子供「父さん」

やや間

ダンショク「わかったよ。持っていくよ」

妻「よかった。今持ってくるわね」
子供「ビタミンには気をつけてくれよ」
ダンショク「ああ。気をつける気をつける」
子供「あ、あとこれ」
ダンショク「なんじゃこれ」
子供「なにいってんだよ。爪楊枝だよ。いるだろ？」
ダンショク「なんでだ」
子供「歯になんか挟まった時どうすんだよ」
ダンショク「指でとるじゃろ」
子供「そんな危機管理能力でカムチャッカの海を渡れるのかよ、父さん。その指が汚くて、そこから感染症とかが広まったらどうするんだよ」
ダンショク「だとしても爪楊枝はさすがにいらんじゃろ」
妻「あ、あなたトマトジュースです（キューブを持ってくる）」
ダンショク「そのサイズのやつなのか」
妻「ええ。足りなくなったとき困るかなと思って」
ダンショク「カバンに入らんぞ」
妻「どうにかなりませんか？」
ダンショク「どうにもならんぞ」
妻「じゃあどうするの、トマトジュース」
ダンショク「おいていくしかないだろう」
妻「なんでそんなこと言うの」
ダンショク「しょうがないじゃろう。これ以上もってけないんじゃから」
子供「父ちゃんひどいよ」
ダンショク「なんでじゃ」
子供「かあちゃんは父ちゃんのことを思って言ってるのに」
ダンショク「それはそうじゃが、持っていけないんだから」
妻「いいですいいです。ごめんなさい。分かりました。私が悪かったんです。ビタミンには気をつけてくださいね。あなた」
ダンショク「おお。すまんな」
妻「いえいえ。帰ってきたらみんなで飲みましょう」
ダンショク「そうじゃな。じゃ、そろそろ出るかの」
妻「行ってらっしゃい、あなた」
子供「いってらっしゃい」
ダンショク「おう。いってくる」

ダンショク、立つ（立つ流れで現在へ）。

現在

キューブを各々各地へ。

ダンショク「というわけじゃ」

パク「トマトジュースはいらんじゃろ」
スケベエ「んだな」
パク「そりゃ病的なまでの心配性だな」
ダンショク「んだろ。あそこまでいくとヒデえもんだで」
スケベエ「沖積船で送ってくれるならええけどの」
ダンショク「金が掛かるからのお」
パク「それがうつってこんなに買い物しちまったのか」
ダンショク「そうなんだよ。おかげですっかり金がなくなっちまった」
スケベエ「金ってのはたまらんもんだで」（イントレの上にいる）
ダンショク「チゲえねえチゲえねえ」

白兎、入ってくる。

スケベエ「んあ！　兎ちゃん」
白兎「あらみなさん。お元気そうで」
スケベエ「どうしたど。おでにあいたくなったどか？」
白兎「いえいえ。お菓子を売りに来たんです」（キューブを積み上げて売り子台に）
スケベエ「なんだ仕事か」（イントレ下りてくる）
パク「お菓子か」
白兎「はい。みなさんどうですか？」
パク「なにがあるんだ？」
白兎「いろいろありますよ。チョコレートとかキャラメルとか、スニッカーズとか」
パク「そんなんスニッカーズだで」
白兎「いくついりますか？」
パク「１つくれ」
白兎「はあい。パクさん。ありがとうございます」
@スケベエ「おでは饅頭もらおうかな」
@白兎「ハアイ」
スケベエ「饅頭は饅頭でも、兎ちゃんのお饅頭じゃけんのお」
白兎「（無言で蹴る）」

蹴る。
男たち、笑う。

パク「ブアカーオ仕込みの中段蹴りだで」
ダンショク「ほかのおなごでも買ってろ！」
スケベエ「ひでえど、兎ちゃん」
白兎「サイテー」
パク「んだぞんだぞ。最低だおめえは」
ダンショク「サイテーだバーカ」
スケベエ「えーなんでだよ。おめえらだって大して変わらんだろがよ（と言いながらダンショク、パクの方へ寄る）」
パク「俺らを巻き込むんじゃねえ」
ダンショク「あっちいってろ！」
とかとか

監督、登場。
男たち、ピリッとなる。
監督、唾を吐いて、あたりを見回す。
監督「なんだあ、やけに楽しそうだのう。わしは動物園にでも来てしまったかいのう」
そういって歩いてみたり。
監督「お前はなんの動物なんだ？　え？」
監督「自分の糞ぐらい自分でかたしてくれよのう？」
監督「一寸云って置く。分かってるものもあるだあろうが、我が博光丸は日本国内の行きずまった人口問題、食糧問題といった社会問題に対して、月面開発をすることで解決しようとする国家推進の「かぐや計画」の一貫であり、その「かぐや計画」の根本をなす最も効率的なエネルギー「蟹油」を精製する船である。我が博光丸は、この「蟹油」精製において、ほかの国とは比べ物にならない優秀な地位を保っており、「かぐや計画」にとって、いや日本国にとって重大な使命を持っているのだ。わかったか！　くれぐれも勘違いの無いように！」
監督、唾を吐いて出ていく。

やや間

男たち、笑う。（ここでなんとなく、次の場の構図になる）

白兎「何みんな笑ってんの。何よあの態度。監督だからって威張りすぎじゃない？」
スケベエ「おっ、いいぞ兎ちゃん！　もっと言ってやれ！」
白兎「みんなのことをものかなんかだと思ってるのよ？　悔しくないの？」
ダンショク「悔しくないことはないが、向こうは監督で、こっちはただの漁夫だけんのお。逆らったら殺されちまう」
パク「殺されるのはいやだで」
スケベエ「んだんだ」
白兎「だからって何でもしていいってわけじゃないでしょう」
スケベエ「いっそのこと、俺らでやっちまうか」

やや間

男たち、笑う（この頃はまだ余裕があるのである。まだ冗談として笑える）。
白兎「もう」
パク「みんなが糞壺とよばれる部屋でバカみたいに騒いでいるとき、船長たちもバカみたいに騒いでいた！」

5場　船内のお偉いさんたちが集まる部屋

キューブを椅子にして座る。

ダンショク→ロシア人（ヴラディスラフ）　パク→船長　スケベエ→ロシア人（ムスティスラフ）　白兎→無電係

浅川、入ってくる。（パクのセリフ直後に入ってくる。これが転換）

船長「や、監督どこに行ってたんですか。先にお酒を開けてしまいましたよ」
監督「いやいや、船長。漁夫たちの臭い部屋ですよ。いつ行ってもあの部屋のにおいには慣れませんな」
船長「まったくですな」
ヴラディスラフ「やーやー、アサカワさん。やー。もうウォッカ飲んじゃってるよー」
監督「あーヴラディスラフさん。どうもどうも。ご無沙汰しております」
ヴラディスラフ「どーもどーもー。何やってたんですかー」
監督「遅れてすみません。港でガキが騒いでまして」
ヴラディスラフ「あーカキがー。柿食えばー鐘が鳴るなりー法隆寺ー。ですねー」
監督「ええまあ。あの、そちらは」
ヴラディスラフ「あー。こちらはムスティスラフです」
ムスティスラフ「どーもー。ムスティスラフです」
ヴラディスラフ「技術士さんでーす」
ムスティスラフ「博光丸の「蟹油」にはいつもお世話になってマース」
監督「あぁ、どうも、それは」
ムスティスラフ「毎日飲んでマース」
監督「え」
ムスティスラフ「はーーーー！　ジョークジョーク。ロシアンジョーク。あれ飲むと死んじゃいマース」
監督「ああ。ははは」
ヴラディスラフ「ははは。我々も死ぬのはいやデース」
監督「ははは」
ヴラディスラフ「浅川さんも、死ぬのは嫌でしょう」
監督「そうですね」
ヴラディスラフ「ま、浅川さんも危ない橋渡ってるわけですから、お互い慎重に行きましょう」
監督「はい」
ムスティスラフ「いいんですか？　日本のための「蟹油」を私たちに横流ししちゃってもらっちゃって」
監督「見返りは頂いておりますから」
ヴラディスラフ「ははは。我々はいいビジネスパートナーに恵まれたみたいでーす」
監督「そう言っていただけると嬉しいです」
ムスティスラフ「月の石が欲しいなんて浅川さんも変わった人デスネー」
無電係「船長。連絡が入りました。博光丸、出航せよ、だそうです」
船長「お、そうか」
ヴラディスラフ「どうしたんですかー」
監督「いえ、そろそろこの船も出航だそうで」
ムスティスラフ「えーこの船でペタンク出来るんですか！」
ヴラディスラフ「外国では案外若者もやってまーす」
監督「あ、いえ出航です。出航」
ヴラディスラフ「あーもうでちゃうんですか」
ムスティスラフ「え、まだそんなにウォッカ飲んでないデース」
船長「じゃあ、みなさんそろそろ」
ヴラディスラフ「じゃあ、ムスティスラフ。いきましょー」
ムスティスラフ「え、ウォッカ」
ヴラディスラフ「いきますよ」
監督「いい報告を待っていてください」
ムスティスラフ「次の沖積船でまたきまーす」
ヴラディスラフ「今回も期待してますよー」
監督「はい」
ムスティスラフ「まだ、ウォッカ全然飲んでないでーす！」
監督、白兎、部屋を出て行く。扉バタンで転換。

6場　糞壺

キューブ、門みたいにする。

労働後の、漁夫たちが集まっている。

スケベエ「なんで港に泊まっている間も仕事があんだ、糞！」
ダンショク「んなこと言ったってもう出航じゃろ。土に思い残すことはねえか？」
パク「思い残すことはねえけど、どうしたって心残りだで」
スケベエ「また何か月も海の上だ」
ダンショク「何が心残りなんで」
パク「それがな」（この流れで回想へ）

回想

男たち、パクの家族になる。スケベエ→妻。ダンショク→子供。

妻「もう、いくの」
パク「ああ、もういかんと間に合わん」
妻「そう」
パク「すまんの、家のこと任せっぱなしにしてしもうて」
妻「それはいいんですけど」
子供「お父ちゃん」
パク「お喜一郎。ちょっとまた父ちゃん働いてくるから、しっかり母ちゃんの手伝いをするんだで」
子供「うん」
パク「それに、お兄ちゃんになるんだでな」
子供「うん」
妻「この子にあわせれんのが残念だでな」
パク「んだなあ」
妻「手紙送るけん」
パク「おお、そうか、それはうれしいなあ」
妻「まっとってくださいの」
パク「おう。待っとる。んじゃ、行ってくるかの」
妻「お気をつけて」
子供「いってらっしゃい」
パク「おう」（この流れで現在へ）

現在（キューブをもって各地へ。ここで姉と弟がやりやすくなっているといい）

ダンショク「おめえ、新しい子供ができんのか」
パク「えへへ」
ダンショク「しらんかったど。元気な子だとええの」
パク「そうだの」
スケベエ「きっとくっせえ子が生まれてくるんだで」
パク「うるせえ！」

男たち笑う。（炭山の場所を開けておく）

そこに、炭山、入ってくる。

@灰山「今日は」（ストップモーション）

（炭山は角ツラのサスへ）
炭山「その部屋は臭かった。蟹のみそや果物、酒やたばこ、男たちの汗、そういったものがぐちゃまぜにされて腐ったようなにおいがした。その空気を大きく自分の肺に入れることで、ここにいる人間が、この部屋で、この船でどのような時間を過ごしてきたのかが少しわかるようだった。男たちはこんな部屋の中で、それでもなお明るく過ごしていた」

@炭山「仲間さ入れて貰えます」
スケベエ「おう、入れ入れ。新入りが来たど」
ダンショク「新入りか」
パク「おっ、新入り。どこから来たど」

※みんなで質問攻めにして、炭山がくるくる回る。というのはどうか。

@炭山「僕は夕張から」
パク「なんだ、おめえ。えらいなまっとるの」
炭山「いえそんなことないはずです！　以前、重労働をしてましたから僕の体は決してなまってなどいません！（はしゃぎまわる、なぜかスケベエも一緒に）」
ダンショク「なにをやってんだ、馬鹿、そっちじゃねえよ、訛り、アクセント！」
炭山「あ、そっちですか。皆さんに合わせて喋ってみたのですが」
スケベエ「フランクに行こうでよ」
炭山「それよりそのフランクフルトをしまってください」
ダンショク「なにやってんだ、お前、馬鹿」
スケベエ「え？」
ダンショク「自分の言葉でええでよ」
炭山「はい」
パク「えれぇやつが入ってきたど」
スケベエ「んだな」
ダンショク「しかし夕張ったらあれか、メロンが有名なとっか」
炭山「そうです」
スケベエ「ん、なんだメロンて」
ダンショク「メロンったらメロンだがよ」
パク「んじゃ、おめえ、メロンつくっとったんか」
炭山「いえ、僕は炭鉱で働いていました」
ダンショク「炭鉱！　夕張炭鉱か」
炭山「はい」
スケベエ「んじゃあ、ここでの名前は炭山（やま）だな」
パク「お、炭山か、ええのええの」
スケベエ「ええじゃろ」
ダンショク「うん。ええ」
炭山「炭山（やま）ですか」
スケベエ「そうじゃそうじゃ。ええじゃろ」
炭山「はい！　ありがとうございます」
パク「夕張炭鉱は人が多いじゃろ」
炭山「はい。ここも負けず劣らず多いですが」
パク「ははっ。ちげえねえ、ちげえねえ」

パク「この博光丸には４００人ぐらい乗っ取るがな」
スケベエ「だいたいが俺らみたいなもんさ」
パク「金がねえ、金がねえ」
ダンショク「臭せえ、臭せえ」
男たちまた笑う。

ダンショク「夕張炭鉱っていやあ、この間、爆発があっちゃろ」
パク「あ、そうじゃそうじゃ」
炭山「はい。そこで働いていました」
ダンショク「そうだったんか」
パク「そりゃ、大変だったのう」
炭山「ええ」
ダンショク「炭鉱じゃよくあることとはいえなあ」
炭山「はい」
スケベエ「ここもそう変わらんけどの」
ダンショク「そうじゃな」
パク「うん」
スケベエ「それでなんで蟹工船なんかにきたんだで」
炭山「月に行きたいんです」（キューブに登ってみる）
スケベエ「月？」
炭山「はい。行き場もなく港のあたりをぶらついていたら、この船にのったら、月に行けると聞きました」
ダンショク「そういや、そんなことも浅川の野郎が言っとったかもしれんな」
パク「あんなんで集まるやつがおるんか」
炭山「皆さんは違うんですか」（ここまでに角へ）
パク「ちげえちげえ」
スケベエ「ほとんどのやつらは金がなくてこの船にのっとるでよ」
ダンショク「蟹工船は、給料がええけんの」
炭山「なぜですか」
パク「危ない仕事だからの」
炭山「そうなんですか」
ダンショク「波も危ない。時間も長い」
スケベエ「それにカムチャッカのカニの呪いだで」
炭山「カムチャッカのカニの呪い？」
パク「「蟹油」にいっぱい触れてると、体にカニ型のアザができるんだ」
炭山「カニ型の痣が？」
ダンショク「んだんだ」

そこに、白兎、登場。

白兎「みなさん、もうお菓子はいらないですか？」

スケベエ「んあ、兎ちゃん。新入りだで」
衝撃を覚えたのか見つめあう二人（扉付近と、角付近）。姉と弟なのである。
スケベエ「なあに見つめ合ってんだ炭山。一目惚れでもしちまったか？」
炭山「い、いえ、深海魚みたいな顔をしてるなと思って」
白兎「（イラッ）」
スケベエ「そうかぁ？」
パク「肌が白くてなんかピョンピョンしとるじゃろ？　だから白兎ちゃんで、兎ちゃんだ」
ダンショク「兎ちゃんを狙うとスケベエが黙ってねえで、炭山」
スケベエ「ニッポン男児たるもの、それだけはゆるさねえでよ」
炭山「あぁ（姉の視線が怖いのかもしれない）」
白兎「炭山（やま）さんっていうんですね。どうですかお菓子は」（炭山に寄る）
炭山「（姉がそういう態度をとるので）あ、あぁ。じゃ僕は、スニッカーズを」
スケベエ「なんだい炭山（やま）ぁ、お饅頭はいらんのか」
ダンショク「止せバカ」

監督が空き缶をたたく音がする。

監督「出航！　出航！」

漁夫（ぎょふ）は支度をして急いで出て行く。

ダンショク「おい！　出航だとよ」
パク「出航か！」
スケベエ「炭山（やま）も急がんと、ぶたれるドぉ」
炭山「は、はい！」
ダンショク「炭山（やま）、さきいっとるど」
炭山「はい！」

男たち、みんなが仕事に行く。

7場　姉と弟（イントレの動線には置かない）

炭山「姉ちゃん」
白兎「あなた炭鉱に行ってたんじゃなかったの？」
炭山「逃げてきた」
白兎「深海魚ちゃうわ！」

ドロップキック。
戸惑う弟。

炭山「？？？」
白兎「逃げてきた？」
炭山「（まだ、理解できていない）爆発があって、それで。姉ちゃんは？」
白兎「私はこの船で売り子をやってるの。この船は「かぐや計画」の中心だってきいたから」
炭山「俺も港でその噂を聞いて乗り込んだ。月にいけるらしい」
白兎「月に行くつもりなの？」
炭山「あたりまえだろ。月に行くのは子供の頃からの夢なんだ」
白兎「夢見がちね」
炭山「何言ってんだ。夢を見るから人生は輝くんだろ？」
白兎「そうね。２人で一緒に行きましょ！」
炭山「何言ってんだ、俺のほうがはやく行くさ（イントレ上に）」
白兎「なんでよ。一緒に行けばいいじゃない」
炭山「そんな簡単に行けるものじゃないだろ。ここの仕事の給料がいいのは危険な仕事だからだそうだ。それこそ炭鉱と同じくらい。でも月に行くためだったら俺はどんなことでもしてやる」

やや間

白兎「そんなに月に行きたいの？」
炭山「あぁ、当然だろ」
白兎「当然、ね」
炭山「姉ちゃんもだろ」
白兎「私は、どうだろ」
炭山「ええ？　なんだよそれ」
白兎「んーん。なんでも、、、」

やや間

白兎「いつだっけ？」
炭山「ん？」
白兎「月に行くのが私たちの夢になったの」
炭山「そんなの忘れちゃったよ。（イントレ降りる）いまは、目の前にある可能性にかけてみるだけさ」
白兎「そうね。あ、そうだ。これいる？（幸運の石を投げる）」
炭山「なんだよこれ」
白兎「スケベエさんがくれたの」
炭山「もらいもんあげていいのか？」
白兎「スケベエさんはそんなんじゃ怒んないよ」
炭山「それにしてもきったねえ石だな」
白兎「なんか、持ってると幸せになれるんだって」
炭山「この石が？」
白兎「らしいよ？」
炭山「じゃあ、これは月の石だな」（ここらへんで同じキューブの上に乗る）
白兎「月の石？」
炭山「ああ」
白兎「アポロの？」
炭山「そう。アポロが月から持ち帰ってきた石だ」
白兎「月はそんな感じの石で埋め尽くされてるの？」
炭山「知らねえよ。まだ行ったことねえんだから。それを俺の目で確かめるのさ」
白兎「そうね」
炭山「あぁ」

監督が入ってくる。

監督「なんだぁ。港であんだけ騒いどいて、いきなり女にうつつ抜かしてサボっとんのか？働け働け！　博光丸、出航だ！」（転換。音照変化。階段から転げ落ちる感じ。ハイテンポ。豪雨）

８場　出航・嵐

監督二階へ！
男たち出てきて、労働のシーンになる。イントレ動かしつつ、炭山イントレに飛び乗る

ダンショク「炭山（やま）！　しっかりひけ！」
炭山「はい！」
パク「炭山（やま）！　おくれてっどお★（反時計）」
炭山「すみません！」
スケベエ「はよはよ」
炭山「はい！　港を出航して早々、嵐が来た。俺らは川崎船が波に奪われないように、体に縄を巻きつけ、引っ張った★（反時計）」
監督「お前らの命の一つや二つ構わねえが、川崎船一つ取られてみろ！　大変なことになるからな！　死んでも綱をはなすな！★（時計！）」
炭山「俺よりも背の高い波は、船のヘリを、まるで自分の家の敷居をまたぐかのように乗り越えてきた。そのたびに漁夫の身体は引っ張られ、黒々と開いた大海原に飲み込まれそうになった。この縄は月へとつながっているのだ。★（反時計）絶対に離すものか！　何度も何度も心の中で叫びながら俺は必死で縄に食らいついた★（反時計）」
ダンショク「炭山（やま）！　縄をもっと身体に近づけろ！　持ってかれるぞ！★（反時計）」
炭山「はい！　どれくらいの波に呑まれそうになったか。冷え切った腕にはもう力が入っているのかどうかさえわから無くなっていた。徐々にカムチャッカの獣は冷静さを取り戻し、（イントレ戻しだす）灰色の世界と不気味な静けさが訪れた。水平線の彼方か

ら、オーーという断末魔の叫びが聞こえていた。男たちは、ゴミ溜めのように臭い、「糞壺」に戻ると、皆、誰一人として口をきかずに横になった」

みんな一斉に倒れる。と同時に白兎イン。

白兎「ごはんよ！」
皆「飯だ！」
スケベエ「どうせ大したもん出んでさ」
白兎「今日は、時化てるから汁なし！」
@パク「なんだって？」
スケベエ「馬鹿なこと言ってんじゃねえ！」
白兎「ごめんね！」
スケベエ「くそったれが！」
ダンショク「炭鉱のはどんなだった？」
炭山「汁はでましたね」
ダンショク「はっはっは。そりゃそうだで。ここのコメはバラバラしてるだろ」
炭山「そうですね。でも炭鉱のコメは真っ黒でした」
スケベエ「違えねえ違えねえ」

監督、入ってくる。

@監督「おいおい。行き倒れの乞食みたいに、ガツガツくらうな。仕事もろくに出来ない日に、飯ば鱈腹食われてたまるもんか」

一瞥して出ていく。

ダンショク「なんだい、監督の野郎」
@スケベエ「一体、あいつにあんなことをいう権利があるのか」
白兎「そうよ、もっと言ってやりなさいよ」
@ダンショク「浅川ったら、蟹工の浅か、浅の蟹工かってな」
@パク「ケチケチすんねえ、なんだ、飯の１杯や２杯」
白兎「実際に働いているのはみんななんだから。浅川はあなたたちの命をなんだとも思ってないのよ」
スケベエ「んだんだ。実際に命かけてんのは俺らだ」
パク「んだんだ、違いねえ」
スケベエ「俺がぶん殴ってやる！」
@ダンショク「えらいえらい。そいつを浅川の前で言えば、なお偉い！」

男たち、炭山も含めて笑う（炭山が受け入れられていく）。

白兎「もう」
炭山「スケベエさんは、どうしてこの船に来たんですか？」
スケベエ「お、いいことをきくな炭山」
ダンショク「きかんでええ、きかんでええ」
パク「どうせくだらんで」
スケベエ「なんでだ。俺のはなしもきいでくれ」
炭山「はい」
スケベエ「あれはこの間の蟹工船から帰ったときだで」（流れで回想）

回想（キューブが玄関になっている）

スケベエの家。炭山→祖母。ダンショク→祖父。白兎→妻。パク→子供。

白兎、扉になった後、息子役に変化

スケベエ「ただいまー」
妻「あらあなた。おかえりなさい」
息子「父ちゃんおかえりー」
スケベエ「ただいまー。ながかったー。久しぶりの家だ」
妻「お疲れさま」
祖父「おぉ、かえったんか」
スケベエ「ただいま父さん」
祖母「あぁースケベエ。おかえり。おっきくなったねえ」
スケベエ「おっきくなったって、前からこんなんだよ母ちゃん」
祖母「そうだったかのお」
スケベエ「そうだで母ちゃん。もうおっきくはんならんて」

妻、荷物とかをお受け取りに行く。

妻「え、くっさ！」
スケベエ「え？　なに？」
妻「え、クッサ。え、なにこの臭い。くっさ。え、くっさ。え、ちょっとまって。うん。クッサ」
スケベエ「しょうがねえだろ、こっちだって死に物狂いで稼いできてるんでねえか」
妻「え、これ加齢臭とかそういうあれじゃないよ？　死臭、死臭。え、クッサ。しいて言うなら腋毛を燃やした時に出る気体を蒸留したやつみたいな臭い」
祖母「どれどれ。（臭いをかいで倒れる祖母）」
スケベエ「母ちゃん」
祖父「かあさん」
妻「お母さん？」

みんなスケベエを祖母からひきはがす。

妻「ちょっとあなた、近寄らないで」

スケベエ「なんでだ」
妻「臭いからよ」
スケベエ「いまは、そんなことを云っている場合じゃねえだろ」
祖父「スケベエ。それ以上はだめだ」
スケベエ「父さん」
祖父「だめだ」
スケベエ「みんなしてなんなんだよ」
妻「とりあえずお風呂に入ってきて」
スケベエ「いやだね。そこまで言うなら逆に入らない」
妻「なにいってんの。このままじゃみんな死んじゃうじゃない」
スケベエ「それが男ってもんだ。これと決めた自分の意志は死ぬ時まで曲げねえ」
祖父「スケベエ。お風呂に、入りなさい」
スケベエ「おでに二言はねえ」
妻「どうしてもお風呂に入らないっていうの？」
スケベエ「ああ、おでは絶対入らない」
息子「父ちゃん。お願いだから入ってくれよお」
スケベエ「いいか、息子よ。これがとおちゃんの姿だ」
息子「くせえよお。死ぬほどくせえよお」
スケベエ「俺だって死と隣り合わせのところで死ぬほど働いてきたんだ。死ぬほど臭くたっていいじゃないか。いや、逆に死ぬほど臭くないと成立しないだろ！」
妻「そんなにお風呂に入りたくないんだったら、どっかにいっちまいな！」
スケベエ「あぁ、いいさ、こんな家、出て行ってやるだ！」

出ていくスケベエ。
そこは歓楽街である。（ピンク、紫、ネオン。汚い街）
パク→風俗嬢１。炭山→風俗嬢２。ダンショク→最強の風俗嬢。

風俗嬢１「お兄さん。どう？　おっぱい安いよ」
スケベエ「お、いいね」
風俗嬢２「わたしのおっぱいも安いよ」
スケベエ「お、いいねえ」
風俗嬢１「ん？　なんかにおわない？」
風俗嬢２「ほんとだ、なんか臭い」
スケベエ「え」
風俗嬢１「え、おっさんクッサ。まじないんですけど」
風俗嬢２「え、これおっさんの臭いなの。ちんぽよりくせえじゃん」
スケベエ「おま、そんなことねえど」

逃げていく風俗嬢。
それを見たうえで寄ってくる最強の風俗嬢。（キューブの上にたったり）
最強の風俗嬢「おにいさん。私でよければどお？」
スケベエ「ぬおおおおうう。おん。お、お、おおおおおおおおおおん。おっしゃあ！　いったるでよ！　よいしょ！（脱がせる。猿股を履いてる）ん！？　おめえが猿股はいとるんか（股の下から言ってみたり）」
最強の風俗嬢「恥ずかしいですう」
スケベエ「そんじゃあ、よいしょ！（やぶく。しかしその下にも猿股）」
最強の風俗嬢「きゃあ」
スケベエ「んだ！　おめえまた猿股はいてるでねえか！」
最強の風俗嬢「いやあん」
スケベエ「いやんじゃねえだで！　おいしょ！（やぶく。しかしまた猿股なのである）。なんでおめえこんなに猿股履いとるんだで！　もういい！」
最強の風俗嬢「あ！、　お兄さん。お金！」
スケベエ「なんでだ」
最強の風俗嬢「まいど」（流れで現在）

現在

パク「おめえは最低なやっちゃな」
白兎「サイテー」
パク「最低だおめえは」
スケベエ「えーなんでだよ。面白かっただろがよ。なあ炭山」
炭山「はい（苦笑）」
スケベエ「炭山はこういっとるど！」
パク「きい使わんでええんだで」
ダンショク「バカにはバカっていうのが一番だで」
スケベエ「みんなが冷てえよお兎ちゃん」
ダンショク「お前何やってんだ！　臭せえのが兎ちゃんにうつっちまうだろ！」
パク「スケベエそれだけは許されねえで！」
スケベエ「そ、そんな臭くねえど！」
パク「臭せえだろがよい」
スケベエ「く、くせえはくせえけど、死の香りたるや、男の勲章なんだで」
白兎「そんなにくさいの？」

白兎、そういって臭いをかぐ。（みんな広がっておく）
白兎、失神。

スケベエ「う、兎ちゃん！」
ダンショク「ばか、おめえ、それ以上近づくな！」
炭山「なにやってんすか、スケベエさん」
スケベエ「ごめん！」
パク「み、水ばもってこい」
スケベエ「お、おう！」
パク「兎ちゃん。無茶しやがって」

ダンショク「おい。ウサギちゃん！　大丈夫か」
パク「みず、水はやくしろ！」
ダンショク「バカ！　おめえそれ以上近づくな」
スケベエ「んじゃ、水、どうしたらええんだ」

白兎、目覚める。（白兎の無意識世界。美しい月）

ダンショク「兎ちゃん」
白兎「夢を、見ていました」
パク「夢？」
白兎「私は大平原を走り回っていました。どこまでもどこまでも続く大平原を、体が軽くなったかのように走り回っていました。走り疲れて草原に寝そべって、ふと真っ暗な空を見上げるとそこには地球があったのです」（サスってもよい）
スケベエ「兎ちゃんが、おかしくなっちまったど」
ダンショク「おめえのせえだ！」
白兎「地球から見る月のように、月から見る地球は半分だけ輝いていました。残りの半分にもところどころ光が輝いており、そこには間違いなく人が住んでるいるんです」
炭山「どうします？」
スケベエ「もう一度かがせればええんでねえか」
ダンショク「おい！　やめろばか」

白兎また失神。

パク「今度こそ死んじゃったんでねえか？」
ダンショク「兎ちゃん！」

白兎、異界から戻ってくる。

スケベエ「兎ちゃん！」
白兎「えっと、何の話でしたっけ」
パク「兎ちゃんがもどってきたでよ」
スケベエ「よかっただ」
ダンショク「あいつが、臭すぎて家を追い出されたって話だ」
スケベエ「んだんだ。もうそんなんどうでもええけどの」
ダンショク「んだな」

みんな、ホッとして笑う。

スケベエ「ん？なんか足元に蟹がおるでよ」
パク「何言ってんだスケベエ」
スケベエ「え、おるでよ」
パク「おらんでよ」
スケベエ「あり？　おらんくなった」
ダンショク「寝言は寝ていえアホ」

みんな、笑う。

ダンショク「もうねるぞ」
パク「おう」
白兎「じゃあ、私はこれで」
スケベエ「あ、そう？　ここで寝てもええんだで？」
白兎「いえ、やめときます」
スケベエ「あれ？」
パク「じゃあな、兎ちゃん」
白兎「はい。また明日も頑張ってください」
男たち「おう」とか「はい」とか。
白兎「それじゃ、おやすみなさい」
男たち「おやすみー」

男たち、自分の寝る場所に行く。

スケベエ「んーやっぱ、蟹がおるでよ」
パク「蛆虫じゃ、蛆虫。おめえが臭えから湧いとるんじゃ」
スケベエ「うるせえ」

炭山、笑ってる。

スケベエ「それにしても、兎ちゃんはめんこいなあ」
ダンショク「ねろねろ」
（ここらへんまでには暗くなっている）

9場　事件

監督が入ってくる。（扉の向こうは明るい）
何か焦っている様子。

監督、懐中電灯とかでもいいな。

監督「どこだ、どこだ、どこだ、どこだ」

色々なところを探している。

監督「ない。誰だ。くそっ」
とかとか。

白兎、入ってきて。

白兎「どうしたんですか、浅川さん」

監督、びっくりする。

監督「ヒカリ」（奥さんの名前何にしよう）
白兎「ヒカリ？」
監督「あぁ、兎か。なんでもない。大丈夫だから、ゆっくり休んでなさい」
白兎「ホントに大丈夫ですか？」
監督「あぁ。君は何も心配しなくていい」
白兎「それじゃあ」
監督「ああ。またあとでな」

白兎、はける。とまたいらいらがたまってくる。

監督「ああ！　お前ら寝てるぐらいだったらさっさと仕事をしにいけ！」

缶をガンガンたたく。（明るく）

監督「起きろ！　起きろって言ってるだろうが！　豚ども！」
スケベエ「んにゃあ。仕事ったってまだ日が出てないで」
監督「うるせえ！　さっさと行け！」

男たち、いやいや仕事に行く。
監督、探す。

監督「誰がとりやがった」
とかとか。

男たち、ものすごい勢いで戻ってくる。

ダンショク「無理だでこりゃ」
監督「何をしてるんだ！　さっさと行けと言ってるだろ！」
ダンショク「行けったって外は大時化でよ！」
監督「何言ってんだ、ようやくカムサッカまで来たんだろうが。ようやく蟹が取れるんだ。カニを取らないお前らにどんな価値があるというのだ。蟹だ！蟹だ！　蟹をとらんか！」
パク「こんな時化じゃ死んじまうど！」

@監督「貴様らの命がなんだ、さっさと行け！」
スケベエ「お前！」
パク「スケベエ！」

スケベエ、そういってとびかかろうとするが、ダンショクに止められる。

ダンショク「行くぞ！」（転換）

※ここからは、監督が必死に何かを探しているシーンと、仕事のシーンが同時に進む。監督がものを探しているのが波になり、嵐になる。「どこだ」「どこにやった」などと言っている。

@炭山「カムサッカの海は、よくもきやがった、と待ち構えているように見えた。ガツガツに飢えている獅子のように、俺たちにいどみかかってきた★（ツラ）。船はまるで兎より、もっと弱弱しかった。空一面の吹雪は、風の具合で、白い大きな旗がなびくように見えた。時化は一向にやみそうになかった。薄い煙のような雲が、手が届きそうなうえを、マストにうち当たりながら、急角度を切って吹き飛んでいった★（微奥）。四囲にもりもりと波がムクレ上がってくると、海に差し込む雨足がはっきり見えた。それは原始林の中のスコールのように不気味だった」

パク「炭山（やま！）。ちゃんとつかまっとらんと落ちるぞ！」
炭山「はい！」

めちゃくちゃ船が揺れている表現。★（下手）

ダンショク「大丈夫か！」

男たち、立ち上がり際に返事「おう」とか。

パク「ひでえ波だ！」
スケベエ「浅川の野郎、本気で俺たちのこと殺すつもりだで」
パク「こんなんほんとに死んじまう！」
ダンショク「おまえら、死んでも生きて帰るんだで！★（上手）」
炭山「ヒューストン。ヒューストン。こちらアポロ１１号。聞こえますか！」
ダンショク「何やっとるんだ炭山（やま）！★（ツラ）」
スケベエ「んあ！　それは俺が兎ちゃんにあげたやつだで！」
炭山「はい！　いただきました！」
スケベエ「なんでだ！」
パク「そんなの後でいいだろ！★（奥）」
炭山「ヒューストン。ヒューストン。こちらアポロ１１号。聞こえますか！」
ダンショク「あとでにしろ！★（ツラ）」
炭山「まってください！」

ダンショク「なんだあ！」
炭山「聞こえます。この石の水平線の向こうから、ヒューストンの声が聴こえてきます！★（上手）」
ダンショク「何言ってんだおめえ！」
炭山「大丈夫です！★（下手）　ヒューストンが付いていればアポロはどんな困難でも乗り越えられるんです！★（ツラ）」
パク「アポロってあれか、ロケットのか」
炭山「そうです。アポロは月に行くんです」
ダンショク「絶対死ぬなよアポロ１１号」
炭山「はい！」

監督、笛とかを持っておくか。

監督「整列！」

イントレを直す。
男たち、下手に一列に並ぶ。

監督「今から聞く質問に嘘偽りなく答えろ！　お前たちの中で、近頃倉庫に入ったものはいるか」
ダンショク「いえ、私は入っておりません」
監督「お前は」
パク「入っておりません」
監督「お前は」
スケベエ「同じく、入っておりません」
監督「お前は」
炭山「入っておりません」
監督「糞野郎！（炭山をける）」

監督、はける。

スケベエ「大丈夫か炭山（やま）」
炭山「はい。大丈夫です」
パク「知らねえって言ってんのに」
炭山「すみません」
ダンショク「なにがあったんだ」
スケベエ「俺、ちょっと見てくる」
ダンショク「おう。気をつけろ」

白兎、はいってくる。

スケベエ「あ、うさぎちゃん。また後でな」

白兎「スケベエさん？」

スケベエ、はける。

白兎「どうしたの？」
パク「炭山（やま）が浅川にけられたで」
白兎「大丈夫？　怪我は？」
炭山「いえ、大丈夫です」
白兎「どうしてけられたの？」
ダンショク「わからん。今スケベエが浅川をつけてる」
パク「かなり焦ってるように見えたど」
白兎「なにがあったのかしら」
ダンショク「炭山」
炭山「もう大丈夫です。すみません。ありがとうございます」
パク「ほんとに大丈夫か？」
炭山「ええ。不意打ちだったんでガードしそこねました」
ダンショク「もろ入っとったがな」
白兎「お水か何かもってくる？」
炭山「いえ、ほんとに、もう」

スケベエの悲鳴が聞こえる。

ダンショク「ん？」
パク「スケベエの声だで」
白兎「スケベエさん」
ダンショク「俺らがみてくるが、兎ちゃんは炭山をみといてやってくれ」
白兎「分かりました」
炭山「俺も（痛む）」
パク「炭山はやすんでろ」
炭山「すみません」
ダンショク「パク」
パク「おう」

ダンショク、パク、はける。

１０場　姉と弟　スケベエの呪い

白兎「大丈夫？」
炭山「うん。もうほんとになんともないよ」
白兎「痛む？　ここは？　ここは？」
炭山「大丈夫だって。姉ちゃんはいっつもそうだ。俺を子供扱いして。俺はもう子供じゃねえんだ」

白兎「ごめんごめん。でも海から帰ってきて良かった」
炭山「こんなところで死ぬわけないさ。おれはアポロなんだ」
白兎「なにそれ」
炭山「この月の石が教えてくれるんだ。俺の進む道を」
白兎「ええ？　その石が？」
炭山「ああ。アポロは困難にぶち当たったらヒューストンと通信するんだ。そしてヒューストンが道を教えてくれる」
白兎「アポロは月まで行くんだもんね」
炭山「そうさ。アポロはヒューストンと一緒なら月までも行けるんだ（痛む）」
白兎「大丈夫？」
炭山「ああ。ちょっと風の当たるところに」
白兎「うん」
（下手から角を通って上手、中央みたいな感じで移動）

（その後ろで監督とスケベエでてくる。こっちは時計回りに移動。別空間）

監督「おい！　どこに隠した！」
スケベエ「知らねえって！」
監督「嘘をつくな！　お前が隠したんだろう！」
スケベエ「隠したって何をだで！」
監督「しらばっくれてるんじゃねえ！　お前が「蟹油」を隠したんだろう！」
スケベエ「ちげえって。そんなん知らねえで！」
監督「じゃあ、なんで俺の後ろをこそこそつけてきたんだ！」
スケベエ「気になったんだで。すまねえすまねえ」
監督「お前、あれがなくなることが日本の発展の妨げになることをわかってやったのか！」
スケベエ「だから、俺じゃねえっていっとるでねーか！」
監督「うるさい黙れ！　お前が「蟹油」をとったんだ！　お前が！　どこに隠した！」
監督、スケベエをぼこぼこにする。
スケベエの悲鳴。

監督、２階へはける。

遅れて、ダンショクとパクが入ってくる。

パク「おい。大丈夫かスケベエ」
ダンショク「どした」
スケベエ「浅川の野郎容赦ねえで」
ダンショク「なにしたんだおめえ」
スケベエ「なにもしてねえで。ただ後ろをつけてただけだ。そしたら、浅川の野郎、お前が「蟹油」をとったんだろとかいって、これだで（痛い）」
パク「大丈夫か」
スケベエ「折れてはなさそうだ」
パク「おめえは身体だけは頑丈だけんな」
スケベエ「へへへ」
パク「ちょっと、服脱いでみろで」
スケベエ「なんでだ」
パク「怪我をちゃんとみんとあぶないでさ」
ダンショク「んだな。ちょっとみせろ」
スケベエ「ええよそんなん」
ダンショク「なに恥ずかしがっとんじゃ気持ち悪い」
スケベエ「ダンショクはそういう気があるじゃろよ」
ダンショク「おめえにはねえが」
パク「いいからみせろって」
スケベエ「あっちょ（みられる）」

スケベエの身体には蟹のあざがある。

パク「お、おめえ」
ダンショク「かいい、かいいってそういうことだったのか」
スケベエ「へへ。すまねえ」
ダンショク「いつからだ」
スケベエ「もう、当分前からだ。んにゃ、まだ大丈夫よ」
パク「大丈夫なのか？」
スケベエ「時々蟹どもが足をはってくるんじゃ。それも一匹や二匹じゃない。もうよう分からんくらい大勢で俺のこの脳みそめがけて登ってくるんじゃ。いまもいる。気を抜いたらやられるんだで」
ダンショク「大丈夫じゃスケベエ。おめえの脳みそなんて蟹でもいらんでよ」
パク「そうじゃそうじゃ。蟹のほうが立派な味噌しとるんじゃ」
スケベエ「そうじゃの」
ダンショク「んだんだ」
スケベエ「このことは炭山には内緒だで」
ダンショク「いわんのか」
スケベエ「ああそうしてくれ」
ダンショク「分かった」
スケベエ「すまんのう」
パク「ええ。ええ」

（姉と弟）
炭山「大丈夫かな、スケベエさん」
白兎「大丈夫よ。みんなが付いてるもん」
炭山「そっか」
白兎「うん」

炭山「そうだね。みんないい人なんだ」
白兎「そうね」
炭山「うん。あーあ。時化はいやだなあ」
白兎「なんで？」
炭山「月が見えないから」
白兎「ああ」
炭山「月が見えたらどんなことでも頑張れる気がするんだ。どんなに辛いことでも、どんなに悲しいことでも、月を見れば、乗り越えられる。そんな気がする」
白兎「それはなんで？　綺麗だから？」
炭山「なんでだろ、わかんないや。でもそんな気がする」
白兎「私はね、うさぎさんに会いたいな。知ってる？　月にはうさぎさんがいるんだよ。うさぎさんがね、お餅を付いてるの」
炭山「模様の話だろ」
白兎「んーん。いるの。月の兎さんは、私たちが月を見上げるように、地球を見上げているの。だからね、兎さんにお餅を分けてもらいながら聞いてみたいの。地球は綺麗ですかって？」
炭山「地球は青いんだろ」
白兎「なに？　ガガーリン？」
炭山「そ。ここから見える地球は灰色だけど、月から見たら青いんだ」
白兎「行ってみないとわかんないよ」
炭山「そうだね。行ってみないとわかんないね」

間

炭山「じゃ、なんで月にウサギがいるか知ってる？」
白兎「なんで？」
炭山「昔ね、猿と狐と兎が山の中で力尽きて倒れている老人に出逢ったんだ。３匹は老人を助けようと考えた。猿は木の実を集め、狐は川から魚を捕り、それぞれ老人に食料として与えた。でも兎だけは（白兎「うさぎは？」）、どんなに苦労しても何も採ってくることができなかった。それでどうしたと思う？」
白兎「どうしたの？」
炭山「自分の非力さを嘆いた兎は、何とか老人を助けたいと考えた挙句、火の中へ飛び込んだんだ。自らの身を食料として捧げるべくね。その姿を見た神様が兎の捨て身の行いを後世まで伝えるため、月へと昇らせたんだ」
白兎「なにそれ神話？」
炭山「そ。どっかのね」
白兎「ふーん。じゃあ月にはウサギがいるんだね」
炭山「そうだね。きっと。じゃ、そろそろみんなのところに行かなきゃ」
白兎「うん。そうだね」
炭山「じゃあまた」
白兎「うん」
炭山、はけていく。
白兎「ねえ」
炭山「ん？」
白兎「あなたは、月が好き？」
炭山「？？？」
白兎「月のこと。好き？」
炭山「なにいってんだよ。当然だろ」
白兎「そう」
炭山「なんだよ」
白兎「んーん。なんでも？」
炭山「なんなんだよそれ。じゃあ行くからね」
白兎「うん」
炭山、はける。
白兎「当然か。当然なんだって、お父さん。お母さん」
監督が出てくる。

１１場　監督と兎（※これは監督と妻でもある）

監督「ヒカリ。こんなところにいたのか」
白兎「浅川さん」
監督「中に入ろう」
白兎「、、、」
監督「どうした？　泣いているのか？」
白兎「涙で目が洗えるほどたくさん泣いた女は、視野が広くなるの」
監督「お前は鳥目だからな」
白兎「馬鹿」

間

監督「いいのかヒカリ？　俺みたいな男で」
白兎「どうしたんですか」
監督「いや」
白兎「女はね、人生で一度や二度は悪い男を愛してしまうの。でもだからこそ、いい男に出会った時、感謝する気持ちになれるのよ」
監督「じゃあ私にもちゃんと役割があるということなんだな」
白兎「そうですよ」
白兎、笑う。

白兎「浅川さん」
監督「ん？」

白兎は監督をじーっと見つめる。

監督「え？　なんだ？」
白兎「いいえ？　なんでも（意地悪そうに）」
監督「なんなんだ、それは」
白兎「なんでもないっていってるじゃありませんか」
監督「何でもないんだったら話を振らなければいいだろう」
白兎「何言ってんの」
監督「なにって」
白兎「浅川さんと喋るのに意味がいるんですか？」
監督「なんだ急に」
白兎「浅川さんがいったんじゃありませんか」
監督「そうだが」

困る監督。

監督「ほら、ヒカリ。風邪ひいてもあれだから中にはいろう」
白兎「（遮って）浅川さんは、月は好きですか？」
監督「月？」
白兎「はい」
監督「どうだろうな」
白兎「月にはウサギがいるんですよ？」
監督「模様の話だろ」
白兎「いいえ。いるんです。お餅をついているんです」
監督「何をいってるんだお前は」
白兎「うさぎはお餅をついているんです。日本では」
監督「？？？」
白兎「中国では、兎は薬をつくっているんです」
監督「薬？」
白兎「そうです。不老不死の薬です」
監督「不老不死（食いつく）」
白兎「ええ」
監督「もし本当にウサギが不老不死の薬をつくっているんだとしたら、私は月に行かなければならんな」
白兎「なんですか？」
監督「そんなもの権力を持つために決まってるじゃないか」

白兎、笑う。

監督「なんだ。なにかおかしなことを言ったか？」
白兎「いーえ？」
監督「じゃあなんで笑ってるんだ」
白兎「浅川さんがアボカドみたいな顔してるからですよ」
監督「え（といって自分の顔を触ってみたり）」
白兎「うそですよ」

白兎、そういってはけようとする。

監督「なんなんだ」
白兎「だから何でもないんですよ」
監督「そうか？」
白兎「浅川さんは、本当に嘘をつくのが下手ですね」
監督「え」
白兎「じゃあ」
監督「ヒカリ」

白兎、はける。
監督、缶を寂しくたたく。その音はリン（仏具）の音となって静寂に響き渡る。

１２場　兎

カンカンと空き缶を鳴らす音がする。

炭山、走ってきてジャックナイフ。
漁夫がイントレを動かす。
蟹を引き上げる。

炭山「「蟹油」は結局見つからなかった。そのことは、そのまま仕事量の増大を意味した。「蟹油」の採油量は船ごとにノルマが定められており、博光丸はいままで、漁夫をモノのように使うことでトップの成績を残していた。その成果がなくなった。これは船の威厳に関わることで、もちろんその遅れを取り戻すために、浅川による今まで以上の労働が始まった」
（※このセリフ結構いらないか）

スケベエ「炭山！　結構さまになってきだでねえの」
パク「おめえよりできるんでねえの」
炭山「スケベエさんの分まで僕が頑張ります！」
スケベエ「助かるでよ！★（上手）」
ダンショク「今日もひでえ海だ。おめえら気い抜くなよ！」

男たち返事。「おう」とか「はい」とか。
炭山「ヒューストン。ヒューストン。聞こえますか？」
パク「なんかきこえるか、炭山！」
炭山「はい！★（ツラ）　海の向こうから声が聞こえます！」
ダンショク「月にはつけそうか？」
炭山「まだまだです。まだ月はだいぶ遠いようです」
スケベエ「あ、兎が飛んだ！」
炭山「え？」
スケベエ「兎が飛んだど！」
炭山「うなぎのドンタコス？　どこの名産品ですか！」
スケベエ「ちげえ。何言ってんだボケ！　兎だ、兎。波の先端が強風であおられて飛んでるんだ！★（下手）」
ダンショク「兎がとんでんのけ！」
パク「ほんとか！」
炭山「どこですか！」
スケベエ「あぁ、まちげぇねえ！　大群だげ！（イントレを元の位置へ）　何やってんだ炭山（やま）。さっさと戻らんと死ぬど！（イントレを角へ）」
ダンショク「兎が飛ぶなんて知らされてねえど！（イントレを元の位置へ）」
炭山「どこですか！」
スケベエ「そんな暇ねえ！　急げ！」
ダンショク「浅川の野郎、俺らのことを殺す気だ」
炭山「どこにいるんですか、兎は！（イントレを角へ）」
スケベエ「ああ、もう、あそこだ、目を凝らせ！」（ストップ）
@炭山「その時俺は幾重にも重なる波の向こうに兎を見た。一面、三角波の頂が白いしぶきを飛ばして、無数の兎があたかも大平原を飛びあがっていくようだった」
スケベエ「見えたか！」
炭山「兎が飛ぶと何が起こるんですか！」
パク「しらねえのか炭山！」
炭山「何が起こるんですか！」
ダンショク「兎はな！　カムチャッカの突風の前触れだ！（イントレを元の位置へ）」

１３場　監督室
パク→船長　ダンショク→無電係　スケベエ→伝令

監督、入ってくる。（この扉の音で転換）

監督「どうした！」
無電係「監督！　隣を並走する秩父丸からです。兎が発生、川崎船を出している場合は帰還すべし、だそうです！」
監督「なに？」
船長「兎！　嵐か！　川崎船は」
伝令役「全船ではらっております」
船長「直ちに、警笛をならせ！　帰還命令だ！」
伝令役「はい！」

動いた伝令役を静止して。

監督「馬鹿者！　なにをしている！」
伝令役「何を、、警笛を鳴らすところであります」
監督「俺が、鳴らせといつ言った！」
伝令役「いえ、船長が」
監督「船長だあ！　お前は誰の指示に従うんだ！（蹴ったりしてよい）」
伝令役「、、、」
監督「おい船長！　あんたは自分の立場を理解してないみたいだな」
船長「なに？」
監督「仕事の権限はだれにあるんだ？」
船長「私は船長だぞ」
監督「ああそうだ。だから船を動かしとけばいいんじゃ。仕事の権限は俺にある。川崎船を帰還させる権限を持っているのは、この俺だ。そうだろ！」
船長「だが、兎が飛んでいるんだぞ」
監督「いくら嵐がこようが海にはカニがいるだろうが！」
船長「そんな」
監督「無電係！　この船の成績はどんな感じだ！」
無電係「、、、」
監督「無電係！　成績はどうだ！」
無電係「はい。本船はトップの成績を収めております。「かぐや計画」に対する貢献度が認められ、国のほうからこちらに祝いの船が向かっているそうです」
監督「そうだ。トップなんだ！　この船はトップなんだ！　誰のおかげでこの成績を残せていると思ってるんだ」
船長「それは、」
監督「続行だ」
船長「え」
監督「仕事は続行だ」
船長「漁夫が死んでしまう！」
監督「漁夫う？　人の替えなんざいくらでもいる。川崎船だけ回収できれば十分だ。ほかに何かあるか？」

間

監督「船長。おまえはただ、そこにたっとればいいんだ」
監督、部屋を出ていく。
残される人。

１４場　パーティ

ボーっと音が鳴る。（これで転換。みんなで音の方を向く）

@白兎「みんな中積船よ！」
ダンショク「本当か兎ちゃん」
パク「お、沖積船か！」
炭山「なんですか中積船って？」
ダンショク「俺らに荷物とか届けてくれる船だ！」
スケベエ「誰が来たって？」
ダンショク「中積船だ！」
スケベエ「本当か！」

@炭山「中積船はみんなを女よりも夢中にした。この船だけは塩っ臭くない、土のにおいがしていた。何か月も何百日も踏みしめたことのない、あの動かない「土」のにおいがしていた。土のことをｅａｒｔｈというけれど、海の上にいる俺たちは、ｅａｒｔｈにはいないということなのか？　沖積線は、そんな俺たちがまたｅａｒｔｈにいるのだということを教えてくれた」

パク「（妻から来た手紙を読みながら）ああ、あいつの臭いがする」
炭山「奥さんですか？」
パク「んだ」
ダンショク「なんだかんだ、心配してくれてるってこっだ」
白兎「いいご家族ですね」
パク「へへへ」
白兎「なんか写真がはいってるんじゃない？」
ダンショク「ほんとだ」
パク「おっ。お！　そうか！　子供が生まれたか！」
炭山「子供ですか！」
ダンショク「みせろみせろ。おっ！　これがか！」
炭山「そっくりですね！」
白兎「可愛い。鼻とか眼とかがパクさんそっくり」
パク「ほんどか？」
ダンショク「ああ。おめえににてとっても不細工だ」

ダンショクと炭山、笑う。

白兎「ちょっとダンショクさん」
パク「なんだと」
スケベエ「パクはきてるだけええでねえが。なんで俺にはなんもねえんだ」
炭山「元気出してください」
スケベエ「手紙ぐらいよこしたってええでねえか。嫁のやつ」
@ダンショク「お前のいない間に、男でも引っ張りこんでるだんべよ」
パク「ちげえねえ、ちげえねえ」
スケベエ「かってにしやがれ」

男たち、笑う。

ダンショク「炭山はなんかとどいたのけ？」
パク「そだそだ」
炭山「いえ。僕は父も母も昔」
ダンショク「ああ、そうだったのか」
パク「すまねえ」
炭山「いえ、でも昔のことをよく覚えています」
スケベエ「どんな父ちゃん母ちゃんだったんだ」
炭山「はい。父も母も、月のことが大好きな人でした」（この流れで回想）

回想　炭山の過去（広範囲が円形に照らされている）
ダンショク→父、パク→母、スケベエ→ムーン、

炭山「父ちゃん。また月の話してくれよ！」
白兎「お父さん。私も！」
父「お！　いいぞ！　じゃあ今日はビッグバンから惑星の形成さらには地球から月ができるまで、全て引力の数式だけで説明できるという話をしよう！」
炭山「おお！　なんかスゲーな！」
白兎「？？？」
母「お父さん。その話はまだこの子たちには早すぎますよ」
父「おお、そうか。じゃあこの話はもっとお前らが大きくなってからだな」
炭山「えーなんかすごそうだったのに！」
白兎「私はウサギさんお話がいい！」
父「ウサギさんの話は母ちゃんの十八番だな」
炭山「えーウサギの話は聞き飽きたよ」
母「まあ、そういわないで」
ムーン「くぅーん。くぅーん」
母「ほら、ムーンもこんなにウサギさんの話を聞きたがってるのよ」
父「お、そうか。ムーンも聞きたいのか」
ムーン「ハッハッハッハッ」
炭山「ムーンが聞きたいならしょうがねえなあ」
ムーン「きゃひーん」
母「よしよし。じゃあウサギさんの話ね。月の模様は何に見えるか知ってる？」
白兎「ウサギさん！」
母「そう。じゃあ、他には何に見える？」
白兎「ウサギさんのほかに？」

炭山「ウサギにしか見えないよ」
母「そうね。でもね、例えば月の模様が大きなハサミを持った蟹に見えるところもあるのよ」
白兎「え、じゃあウサギさんは？」
母「そこではウサギさんはいないの。私たちがみるお月様にも蟹はいないでしょう？それと同じで、そこからみるお月様にはウサギさんはいないの」
白兎「えー」
炭山「他には？」
母「他には、女の子の横顔に見えるところもあるのよ」
父「アラビアでは編み物をしている女のひとだぞ」
炭山「えー」
父「さらに言うとだな、ベトナムでは木の下で休む人だし、オーストリアではおっさんが灯りをつけたり消したりしてるんだぞ」
白兎「動物さんがいい！」
母「動物さんだったら、犬に見えているところもあるわ」
父「モンゴルだな！　悪いことをすると吠えるんだ。アラビアだと怖い怖いライオンさんだぞ！」
炭山「えー！（一緒に）」
白兎「えー！　ウサギさんでよかったぁ」
炭山「ライオンがいるのは怖えなあ」
母「そう。色々な見え方があるの。でも、空に浮かんでいるお月様は一つ。世界中のみんなが、お月様のことを大好きなのよ」
父「そうだみーんなお月様が大好きなんだ。そうだろ？」
白兎「うん！」
炭山「うん！　俺はいつか絶対に月に行くんだ！」
父「いいぞ！　お父さんも負けないぞ！」
ムーン「ワォーン！」（この流れで現在）

現在

ダンショク「家族全員月が好きだったんか」
炭山「そうです。月は僕らの夢なんです」
パク「変わった一家だで」
炭山「みなさんは月は好きじゃないんですか？」
パク「んにゃ。好きじゃないってこたぁねえな」
スケベエ「んだな」
ダンショク「家に帰ったら、子供と月でもみてみるかなぁ」
パク「んだな。そりゃええ」
炭山「ええ。是非」

やや間

スケベエ「ああ、畜生。かえりてえなあ」
パク「またくせえくせえ、いわれんだで」
スケベエ「そんなくせえかなあ」
パク「ここにおるやつらはみんなくせえでよ」
スケベエ「んだな」
ダンショク「かえりてえの」
パク「あぁ、かえりてえ」

『ふるさと』。

兎おいし　かのやま
こぶなつりし　かのかわ
夢は今もめぐりて
忘れがたき　ふるさと

間

スケベエ「ここでは、空も青くねえなあ」
パク「んだな」

間

ダンショク「なにしけっとしてんだ。監督をぎゃふんといわせて帰ろうでねえか」
パク「んだな」
スケベエ「んだんだ」
ダンショク「それに、せっかくのパーティだ」
パク「そだそだ」
ダンショク「こんな機会、二度とねえど」
スケベエ「いっぱい酒のんでやるんだ」
パク「炭山（やま）も今日はのめよー！」
炭山「はい！」

準備（p86）のシーン。
炭山、ダンショク、パク、スケベエ、白兎→準備する人1，2，3，4，5
準備する人1「はーい。準備しますね。準備しますね、今からパーティの準備をしちゃいます」
準備する人2「え、くっさ。この部屋くっさ。本当にこの部屋でやるの？」
準備する人1「そうなんじゃない？　さっき監督さんがそうおっしゃってましたわよ」
準備する人2「チンジャオロースの味付けに、味噌がなかったからうんこ入れたみたいな臭いがするわね」

準備する人１「それ！　もうほんとそれ！　ずっとその匂いがするって思ってたんだけど、喉のここまで出てたんだけど、もう、先を越された！　くやしい！」
準備する人２「もうそうよね。私、やっぱり言葉で生きている人だからこういうの得意なのよね。もうこうなったら５・７・５詠んじゃうわよ。５・７・５」
準備する人１「いよっ！」
準備する人２「（５・７・５詠む）」
準備する人１「いよ！　さすが！」
準備する人３「ちょっとあなたたちはやくして。私たちも仕事あるんだからって、ちょっとあなたシーツにシワがよってるじゃない」
準備する人１「あぁ！　ごめんなさい！」
準備する人３「なにやってんのよ。ばか。もうばか」
準備する人４「ちょっとそこどいてどいて。ってあなたシーツにシワいっちゃってるじゃないのよ」
準備する人１「あぁ！　ごめんなさい！」
準備する人４「これこの間もシワが多かったから結構入念にアイロンかけてきたのに」
準備する人１「ごめんなさい。もう私のバカ。バカ」
準備する人２「そんなに自分を責めなくってもいいんじゃないのってあなたここシワになっちゃってるじゃないの！」
準備する人１「ああ！　もういやあ！」
準備する人５「活動写真の準備大丈夫でーす。え、何全然進んでないじゃない」
準備する人３「ごめんなさいね、この人がシーツをシワにするから」
準備する人１「まだいうのお！」
準備する人５「あーはいはい。はじめますよー」

とかとか。盛り上がればよい。
ドスンとみんなですわることによって転換。

宴会

パク「兎ちゃん。酒くれ、酒！」
白兎「はーい」
スケベエ「おめえはいっぱい荷物届いたろうがよ。酒ぐれえ俺にくれよ」
パク「うるせえ、引っ込んでろ。ごみ豚やろう！」
スケベエ「んだと、アルゼンチン白菜！」
パク「なんだアルゼンチン白菜って。あんのか！　アルゼンチンに白菜はあんのか！」
スケベエ「んなことしらん！　おめえはそういうこまけえこと気にすっからダメなんだ」
パク「それにかんしてはもう語感がいやだ！　やめろ！」。
白兎「はいはい。皆さんの分ありますから」
ダンショク「おめえらだまれ！　活動写真はじまるぞ」
炭山「映画ですか！」
ダンショク「んだ」
パク・スケベエ「おお」

アポロの映像

炭山、食いつく。白兎、立つ。

白兎「それは、アポロ１１号が人類で初めて月に着陸した時の映像だった。宇宙服のせいで丸く膨れている宇宙飛行士は、まるでウサギのように月の上を飛んでみせた。灰をかぶった肌はどこまでも続き、不気味なまでに真っ黒な空には、青く美しい地球がまるで月のように半分だけ光っていた」
スケベエ「月だで炭山！」
炭山「はい！　アポロ１１号です！」
ダンショク「なんもねえな」
スケベエ「おめえはこんなとこに行きたいのか」
炭山「はい！　僕は自分の目で、この目で、この景色を確かめたいんです」
スケベエ「んじゃ、そんときは俺らが地球から手でもふってやるでよ」
白兎「見えないですよ」
スケベエ「見えなくてもええんだでよ」
ダンショク「おめえには見えそうだな」
パク「俺もやるで」
炭山「ありがとうございます！」
ダンショク「よっしゃあ！　今日は月が見えなくなるまで飲むぞ！」
スケベエ「男すけべえ。参ります！」

スケベエ、ボトルを開けちゃうよ。

ダンショク「いよっ！　いいぞ！」
パク「いけー！」
（とか、掛け声）
スケベエ「兎ちゃん。もう１本だで！」（次のシーンの構図になっている）
ダンショク「いったれえ！」
白兎「あんまり無茶しないでくださいよ。新しいのとってきますから」

白兎、はける

ダンショク、キューブとかで音たてたら転換、浅川の扉開けるときにするか？

１５場　監督室
ダンショク→ロシア人（ヴラディスラフ）　パク→船長　スケベエ→ロシア人（ムスティスラフ）

監督が入ってくる。焦っている。

ヴラディスラフ「浅川さーん。おひさしぶりでーす」
浅川「ヴラディスラフさん。お久しぶりです。すみませんお待たせてしまって」
ヴラディスラフ「いいんですよいいんですよ。ウォッカを飲んでましたから」
ムスティフラフ「今日はいいウォッカを持ってきたんです。浅川さんもどーぞ」
ヴラディスラフ「そーねそーね。今日は「蟹油」をもらえるということだしね」
ムスティフラフ「盛大に祝いましょう」
監督「あの、そのことなんですが」
ヴラディスラフ「まぁ、立ってるのもアレなんで座ってください」
監督「は、はい」
ヴラディスラフ「船長さんも、なにか飲みますか」
船長「いえ、私は」
ヴラディスラフ「そーですかー。どーですか、カニの方は。前よりも取れたかな？」
監督「それがですね、」
ムスティフラフ「ここら辺おカニは今頃が旬ときいてまーす。脂がのっておいしいきせつでーす」
ヴラディスラフ「いい「蟹油」がとれるんでしょーう」
ムスティフラフ「いえいえ、ところがヴラディスラフさん。そこは関係ないんデース」
ヴラディスラフ「そうなんですかー。知りませんでしたー」

笑うロシア人。

監督「あの」
ヴラディスラフ「はい。なんでしょー」
監督「今回の、「蟹油」を、少し待ってはいただけないでしょうか」
ヴラディスラフ「えっと日本語よくわからないので、もう一回いってくださーい」
監督「えっと、ですから、「蟹油」がですね、あの、今、ないのでですね、もう少し待っていただけないかと」
ムスティフラフ「えっと、宮崎駿がどうしたんですか？」
ヴラディスラフ「なんかまた新作アニメを作り出したみたいでーす」
ムスティフラフ「おー。こりませんねー」
監督「いえ、あの違うんです！」
ヴラディスラフ「んー？　なんですかー？」
監督「その、あの、「蟹油」が、誰かに盗まれてしまいまして」

ヴラディスラフ「んー？　言っている意味がよくわからないのですが、つまり浅川さんが犯したミステイクによって、私たちは今回「蟹油」を手に入れることができないということですか？」
監督「いえ、その、今はという」
ヴラディスラフ「イエス？　ノー？」
監督「、、、」
ヴラディスラフ「イエス？　ノー？」
監督「い、イエス」

ロシア人、ため息を深く付いて。

ヴラディスラフ「監督さん。ちょっと外の風邪をあびに行きましょう」
監督「で、ですから、今ないだけで、必ず、お渡しを」

監督、連れて行かれる。
裏でボッコボコにされる。

ヴラディスラフ「浅川さん。私はすごく残念です。私たちがここから帰るまでに、どうにかしましょう。そうしたらまた仲良くできます」
監督「そんな」
ヴラディスラフ「別に、「蟹油」じゃなくて売り子でもいいんですよ？」
監督「は？」
ヴラディスラフ「それじゃあ。また」

１６場

ダンショク、パクは寝ている。

@スケベエ「出刃、出刃、出刃を取ってくれ！　漁夫だって、いつまでも木の根っこみたいな馬鹿でねえんだ！　浅川の野郎、ぶっ殺してやる！　炭山（やま）！　いくで！」
炭山「ちょっと。まじで行くんすか」
スケベエ「あだりめえだど。あいつは俺らを殺そうとしでんだで。このまま黙ってられるか！」
炭山「我慢ですよ」
スケベエ「うるせえ！」
炭山「さっきから何やってるんですか！」
スケベエ「なにって、蟹を踏んづけてるんでねえか！　こいつら！」
炭山「蟹なんていないですよ笑」
スケベエ「よーし。ダンショク、パク、いくどお！」
炭山「とっくに寝てますよ！」
スケベエ「あさかわ～！」

炭山、スケベエに連れていかれる。船の中を連れ回される（この過程で転換）。
監督の部屋につく。監督と白兎がいる。

スケベエ「んあ？　兎ちゃんの声がするで」
炭山「しっ！」

扉の向こうから声が聞こえる。

監督「お前は似ていた」
白兎「なくなった奥様にですか」
監督「あぁ。でもお前はヒカリではない」
白兎「はい」
監督「お前はヒカリではないんだ」
白兎「何が、言いたいんです？」
監督「わからん。分からなくなってしまったのだ。この思いが、ヒカリに対するモノなのか、それとも、お前に対するモノなのか」
白兎「それは」
監督「分からんのだ。分からん。分からん。いま俺はお前が欲しい。どうしようもなく、お前が欲しい」
白兎「、、、」
監督「兎。私はどうしたらいい？」
白兎「、、、」
監督「兎！」
白兎「やめてください！」

やや間

監督「すまん」
白兎「いえ」

間

監督「あいつは月が好きだった」
白兎「、、」
監督「月の石が欲しいと言ってな」

間

監督「兎、お前なんだな」
白兎「、、、」
監督「お前が「蟹油」をとったんだな」
白兎「、、はい」
監督「元からそのつもりだったのか」
白兎「はい。そのつもりでこの船にのりました」
監督「、、そうか」
白兎「この沖積船にのります」
監督「なぜ？」
白兎「（微笑む）」
監督「私はお前と一緒にいたいだけなんだ」
白兎「またあえますよ」
監督「兎」

炭山「薄壁一枚向こうから聞こえてくる監督の声はいつもと違って優しかった。そして姉の声もまた、俺の知っている声じゃないような気がした。目の前のカンテラの炎が揺れるたびに、俺の意識もグラグラと揺れた。時化りだしたカムチャッカの波が船のサイドを叩きつけ、船ごと俺を揺らした。おれは、石のように硬くなって動かないスケベエさんをつれて走った。いろんな壁にぶつかり、転び頭を打った。気がついたらおれは糞壺にいた。カニの味噌と腐った魚や男たちの汗の匂いのする空気を必死に肺に取り込んだ。吸いなれた腐った空気は俺の体のすみずみまで行き渡り、俺を腐らせるとともに安心感をくれた。周りを見渡すと、豚みたいにみんなが眠っていた。俺もまた豚となった。真珠が一粒、ほほを伝った」

炭山、寝る。

17場　兎の居場所

カンカンと音が鳴る。朝が来たのだ。

白兎、入ってくる。

白兎「さあみんな、起きて！　今日で沖積船はいなくなっちゃうみたいよ。思い残すことがないようにね！」

男たちは、のそのそと仕事に行く。

割と穏やかな海。

ダンショク「おいっ、炭山！　ちゃんと引け！」
炭山「はい、、」
ダンショク「おいバカ何やってんだ、かせ！」
炭山「すみません★（微上手）」
ダンショク「どうした調子でもわりいのか」
炭山「いえ、」
パク「スケベエもぼおっとしてんな、落っこちるど！★（微上手）」
スケベエ「それでもええかもな」
パク「何言ってんだバカ！　けえったら兎ちゃんがまっとるど」
スケベエ「やめてくれ」
パク「なんだぁ、珍しいな。今日は兎ちゃんがお饅頭をくれるかもしれんで」

パク、ダンショク、笑う。

スケベエ「やめてくれって言っとるでよ！」
ダンショク「どうした、おめえ」
パク「なんかあったんか」
スケベエ「裏切ったんだで★（微ツラ）」
炭山「スケベエさん」
ダンショク「裏切った？　なにがだ」
スケベエ「兎だで。あのアバズレ浅川とつながってやがった★（微下手）」
パク「どういうことだ」
スケベエ「昨日、浅川をぶん殴りに炭山と部屋まで行ったんだで。そしてら、中からあのアバズレの声が聞こえてくるんだで」
パク「なんか、夢でもみとったんじゃろ」
ダンショク「ちげえねえちげえねえ」
スケベエ「チゲえんじゃ。あいつが盗んだんだで」
炭山「スケベエさん★（微奥）」
ダンショク「盗んだって、何をじゃ」
スケベエ「「蟹油」だで。あいつが俺らが必死で集めた「蟹油」を盗んだんだで。あいつのせいで俺は浅川にボコボコにされたんだで」
ダンショク「ほんとかそりゃ」
パク「なんで兎ちゃんがそんなことするんだで」
スケベエ「分からん。だけど、あいつが「蟹油」をとったんだで」
パク「よう分からんが、ほんとなのか、炭山」
炭山「、、、はい」
ダンショク「そんな★（微ツラ）」
パク「後で兎ちゃんに聞いてみよう」
スケベエ「俺たちとあんなに明るく喋りながら裏では嘲笑っとったんだで。ゆるせねえ」
パク「俺には信じらんねえが」
スケベエ「俺だってしんじらんねえで。でも聞いたんだで。俺らを置いて、この沖積船にのってどっかにいくんだで」
ダンショク「そうなのか」
炭山「（うなずく）」

仕事が終わる。

白兎、入ってくる。

白兎「お疲れ様」
男たち「、、、」
白兎「どうしたの？　あれ？　二日酔い？」（なにかとちゃらけてくる白兎）
ダンショク「だとええな」
白兎「どうしたのよみんな」
パク「兎ちゃん。なかったらええけどよ」
白兎「なに？」
パク「あの、俺らにいうことねえか？」
白兎「え？　あ、えっと、あのね、みんなには黙ってたんだけど」
パク「おう」
白兎「私、この沖積船にのらなきゃいけなくなっちゃったんだ」
男たち「、、、（我慢している）」

スケベエ、早足にはけていく。ダンショクとパクもそれに続く。

白兎「ちょっと、みんな！」

１８場　監督。狂気。

監督、かなり必死に入ってくる。
白兎に抱きつき、白兎の存在を確認する。（「ヒカリ」「ヒカリ」と言っている。聞こえなくても良い）

白兎「どうしたんですか」
監督「いなくなってしまったかと思った」
白兎「いなくなったりなんかしませんよ」

頭を撫でられて、落ち着いてくる。

白兎「落ち着きましたか？」
監督「あぁ少し」

やや間

監督「すまんな」
白兎「、、、なにがですか？」
監督「いっつも約束を破ってばかりいて」
白兎「なんですか。自覚してたんですか？」
監督「悪いとは思ってたんだ」
白兎「じゃあ破っちゃダメですよ」
監督「ああ。もう破らない」
白兎「本当ですか？」
監督「約束する」
白兎「じゃあ、私のこと追いかけてきちゃダメですよ？」
監督「え？」
白兎「追っかけてきちゃ」

監督「どうしてだ」
白兎「うさぎを追いかけるのは、思い出の中のふるさとだけです」
監督「ん？」
白兎「いいですね」
監督「わかった」
白兎「ありがとうございます」
監督「あぁ」

二人、はける。

１９場　最後の糞壺。

パク「スケベエ大丈夫か」
スケベエ「大丈夫じゃねえな」
パク「そうか」
スケベエ「蟹がおるでよ。俺の足元に蟹がおるでよ」
ダンショク「いねえ。おめえの足元にはなんもいねえでよ」
スケベエ「おるんだ。おめえらにゃ見えねえだけだ。薄暗い岩穴の中から不気味な目だけがひかっとるだで」
炭山「何言ってるんですか、スケベエさん」
スケベエ「やめろ。やめろ。やめろ。これ以上俺の身体を上ってくるな」
炭山「何もいませんよ」
ダンショク「何もいねえ。お前の身体の上には何もいねえ土！」
パク「そうだぞ。なんもいねえ！」
スケベエ「うあああああ」
ダンショク「パク！」

パク、ダンショク、おさえる。

炭山「どうしたんですか？」
ダンショク「大丈夫だ」

スケベエ、おちつく。

ダンショク「おらんくなったか？」
スケベエ「ああ、すまねえ」
パク「ほら水だ」
スケベエ「すまん」

スケベエ、水を飲む。

スケベエ「炭山」
炭山「はい」
スケベエ「炭山。覚えとるか。カムチャッカの蟹の呪い」
パク「おい、スケベエ」
スケベエ「ええんだ」
炭山「なんですか？」
スケベエ「カムチャッカの蟹の呪いだ」
炭山「ああ、蟹のあざができるっていう」
スケベエ「んだ。丁度こんな風なあざが出来るんだ」

スケベエ、あざを見せる。

炭山「え、それって、え、じゃあ、え、どういう意味ですか？」
スケベエ「そのまんまだでよ。これが呪いだで」
炭山「そんな」
スケベエ「もうだめなんだで。せめて土の上で死にたかったなあ」
パク「何言ってんだで、スケベエ。帰れるでよ」
スケベエ「んにゃ。だめだ。馬鹿な俺にでもわかるんだ。だめだ」
ダンショク「んなことねえで。おめえはバカだからなんもわかってねえ」
スケベエ「んかな。だとええなあ」
パク「んだ。おめえはバカだけん」
スケベエ「んだな。おれはバカだけんな」
ダンショク「んだんだ」
パク「んだんだ」

炭山「翌日、僕のベットの下でスケベエさんはカムチャッカの海のように冷たくなっていた。昨日とは世界がまるで違っているのに、無常にも日常は日常として訪れ、俺たちはいつも通り、仕事を始めた。体がなんだか自分のものじゃないような気がしていた。川崎船の上で、カムチャッカの荒波の音が虚しく聞こえ続けた」

２０場　さらば、兎

ダンショク「浅川のやろう、新しい麻袋さえくれなかった」
パク「こんときぐらいくれてもええのにの」
ダンショク「どうせすぐ海に流すんだからそんなもったいないことはできんだと」
パク「ひでえなあ」
炭山「持ち帰ることはできないんですね」
ダンショク「んだな。腐らせるのもかわいそうだ」
炭山「土の上で死にたかったでしょうね」
パク「んだな。せめてもっと青い海に流せたらよかったの」
ダンショク「ここの海は冷たいでの」

白兎、入ってくる。

白兎「スケベエさん」
ダンショク「なんかようか」
白兎「なにって、スケベエさんを海に流すんでしょ？」
ダンショク「ああ。おれたちでやるが」
白兎「私にも最後を」
ダンショク「やめてくれ」
パク「んだな」
白兎「どうしたのみんな。最後くらいいつもみたいに馬鹿なこと言ってあげようよ。何かいりますか、スケベエさん。今日はお饅頭も売ってますよ！（無理してちゃけてみる）」
ダンショク「そういうのやめてくれ、いうとるんじゃ！」

間

ダンショク「わしらだけでやるけん。どっかいっとってくれ」

白兎、はける。

炭山「やけに静かなカムチャッカにスケベエさんの入った麻袋を投げ入れた。ドプンという濁った音がして麻袋は浮いた。カムチャッカの波は、麻袋を何度も何度も船に叩きつけ、最後にトクンという音を残して麻袋を飲み込んだ」
※この間に炭山だけになっておく。

ボーという音がする。

白兎「みんなは？」
炭山「糞壺にいる」
白兎「そう」
炭山「これにのっていくんだろ」
白兎「うん。ごめんね」
炭山「なにがゴメンなんだよ」
白兎「え？」
炭山「姉ちゃんは、人殺しだよ」

炭山、はける。
残される白兎。沖積船にのる。
※これを監督がみていてもいい。

２１場　川崎船　このシーンは「おおおおおお」という水平線の音が大きい。それは世界の嘆きなのだろう。

カンカンと音が鳴る。

（イントレ動かす）
ダンショク「炭山！　ぼけっとしてんな！　持ってかれるぞ！」
炭山「はい」
パク「今は忘れろ炭山」
炭山「はい！」
パク「アポロはもうやらんのか」
炭山「そんな気持ちじゃ★（弱上手）」
パク「辛いことが忘れられるんじゃなかったのか？」
炭山「ええ。でも、分かんなくなっちゃったんです」
ダンショク「分かんなくなった？」
炭山「ええ。自分が本当に月に行きたいのか」
ダンショク「夢だったんじゃねえんか★（弱下手）」
炭山「夢だったんですけどね。でも、今はよくわからないです★（下手）」
パク「心が痛い日だってそりゃあるでよ。そういう時は、できることだけをやるんだで」
炭山「はい」
ダンショク「とりあえず今は目先のことだけに集中しろ」
炭山「でももう★（微ツラ）」
ダンショク「人間ってのは生命の力に満ち溢れてるんだで。森がありゃ開いて平地にすることができる。荒野がありゃ木々を植えることができる★（下手）。砂漠がありゃ井戸を掘ることができるんだ。ええか炭山★（下手）。人間ってのは生命の力に満ち溢れとるんじゃ」
炭山「そう、なんですかね」
パク「あ、兎だで！」
ダンショク「またか！　帰還命令は」
炭山「出てないです！」
パク「浅川はどうせださんでさ！」
ダンショク「くそっ！★（奥）　おめえら、ぜってえ死ぬんじゃねえで！」（ここでイントレ戻す）

男たち「おう！」

２２場　秩父丸事件（沖積船にする）

監督室。
パク→船長　ダンショク→無電係
男たちの「おう」のすぐ後に扉があいて転換。

監督「何事だ！」

@無電係「船長、大変です。ＳＯＳです！」
@船長「ＳＯＳ？　何船だ？」
無電係「先日まで本船に合流していた沖積船です。火災があった模様です！」
炭山「沖積船！」
@監督「沖積船だぁ？　兎！」
@無電係「一刻と云えないようです」
監督「バカ野郎」
炭山「姉ちゃん！」
監督「なんだお前」
炭山「沖積船には姉ちゃんが」
監督「あ？」
炭山「売り子だ。この間までこの船に乗っていた白兎だ！」
監督「そうか。お前があのバカ女の弟なのか」
炭山「バカ女？」
監督「とんだバカ女だよ、あいつは」

回想のシーン。監督の部屋。監督と白兎。
真実が明かされる。

監督「兎、お前なんだな」
白兎「、、、」
監督「お前が「蟹油」をとったんだな」
白兎「、、はい」
監督「元からそのつもりだったのか」
白兎「はい。そのつもりでこの船にのりました」
監督「、、そうか」
白兎「この沖積船にのります」
監督「なぜ？」
白兎「（微笑む）」
監督「私はお前と一緒にいたいだけなんだ」
白兎「またあえますよ」
監督「兎、、、」

やや間

監督「嘘だったのか？」
白兎「？？？」
監督「お前の、月に行きたいという夢は」
白兎「どうでしょう」
監督「わからん。月に行きたいといったお前の目は確かに本物だった」
白兎「、、、」
監督「分からん。そんなお前が何故「蟹油」を盗んだのか」

やや間

白兎「父は月が好きでした。色んな事を知っていて、どうでもいいことまで色々教えてくれました。母も月が好きでした。月の兎が大好きだった私に、いろんなお話を聞かせてくれました。そしてそんな話を私と同じかそれ以上に真剣に聞いている弟がいました。私はそんなみんなが大好きでした。そしてそんなみんなが大好きな月が、私は大好きでした」
監督「それなら何故」
白兎「父が死んだんです。月への情熱に動かされた父は、ロケットの実験機に搭乗し、事故で死にました。それに気を病んだ母は、病床に付しそれ以降月のことを語らなくなりました。後を追うように母も死に、残された私と弟は別々の家に養子に出されました。家族を結び付けていた月は、ある日突然裏側を向いて、家族を壊したのです。そんな月が、許せなかった。私たちに夢を見せておいて、私の大好きな家族をバラバラにした月が、憎かった。だから、あの怪しく光る「蟹油」を目の前にしたとき、私は何も考えられなくなった。意識は重力を失いふわふわと宙に浮き、身体は私とは別のところで、月の海に沈む亡霊たちによって動かされた。その時私もまた月の海に沈む亡霊なのだと知ったのです」
監督「構わん。もう、そのことは構わん」

やや間

白兎「浅川さん。弟は月が好きだそうです」
監督「、、、」
白兎「私も、もう1度くらい、月を好きになれるかもしれません」
監督「何をいっているんだお前は」
白兎「（笑う）」

現在

炭山「そんな」
監督「馬鹿な女だ」

監督、「蟹油」を取り出す。

炭山「それは！」
監督「律儀に倉庫に戻してから行きやがった」
炭山「なぜ？」
監督「そんなもの私にわかるものか」
炭山「そんなもん今更いらねえよ！」
監督「私だってもうこんなものいらんさ！」

船長は、部屋を出ようとする。
その船長の肩をつかんで制止する浅川。

監督「どこいくんだ船長」
船長「何を言ってるんだ、舵をとるんだ」
@監督「余計な寄り道をせって、だれが命令したんだ」
船長「誰って、船長としてだ」
@監督「船長としてだア！　おい、一体これア誰の船だんだ。何度も言わせるんじゃねえ。これは俺の船だ。俺の船なんだ。俺は蟹工船・博光丸の監督の浅川だ！　俺らは蟹をとるんだ。このカムチャッカの血の海で蟹の亡霊をとりつづけるんだ！」
炭山「蟹より姉ちゃんの方が大切だろ！」
監督「当たり前だろ！　私はこの船でこんな蟹の亡霊を集めていたんじゃない。お前を、お前のかけらを集めていたのだ。兎。何故お前は私にこんなことをさせるのだ。私は私だけではなくお前をも殺さなくてはならないのか。こんな私は惨めか。この音はお前の鼓動なのか。お前の祈りなのか。私はこのことを絶対に忘れない。この瞬間を絶対に忘れないぞ。お前がもういいと許してくれるまで。お前が俺の帰りを迎え入れてくれるまで、絶対に忘れない。お前が死に何年も経った。故人よ。時は薬なのか。その薬はまだ私の傷を癒してくれやしないぞ。一度空いてしまったこの断絶は、時が経てば立つ程自らの重さで裂けていき、その隙間から噴きあげる真っ赤な血によってまた引き裂かれ、とうとう時を分かつまで広がってしまった。なのに私はまだお前を忘れることが出来ない。私の目の前には真っ赤な血の海が広がり、かつては私だった向こうの大陸などもはや見えることはなくなっても、それでもまだ私とお前は陸続きだというのか。マリアナ海溝の奥深くで私たちはまだ繋がっているというのか。握り締めた一本の綱は、ただひたすらに暗闇の中へと伸びていき、いずれは月へとつながっているのか。　この綱を離したら私はお前を忘れてしまうのか。お前と出会ったとき、月に思いを馳せたのは私の方だったのかもしれない。月に行きたいというお前をみて月に思いを馳せたのは私の方だったのかもしれない。月は太陽のヒカリによって輝いているのではない。月の美しい輝きが太陽にヒカリを与えるのだ。灰をかぶった平原はまだ、夜空に輝くお前のことを忘れてなどはいないのだ。」
@無電係「か、監督！　こんなにうっているんです。だんだん早くなります！」
監督「構わん」
無電係「監督！」
監督「わしが構わんと言っておるのだ！　このわしが構わんと。このわしが構わんと言っておるのだ！」
無電係「しかし」
炭山「ヒューストン。ヒューストン。きこえますか！」
監督「何をしている」
炭山「ヒューストン。ヒューストン、こちらアポロ１１号。きこえますか？」
監督「やめろ！」
炭山「ヒューストン。ヒューストン！」
監督「聞こえているのか炭山！」
炭山「聞こえません！　聞こえないのです！　いつも聴こえていた海の向こうの声が！」
※ずっと裏でモールス信号が鳴り続ける。

音が止まる。
かなり長い間
@無電係「沈没です」
船長「、、、、、、」
炭山「、、、、、、、」
間
監督、なにか叩くなりして、はける。
２３場　回想（まったり変わっていく）
ダンショク→父、パク→母
炭山「父さん！　父さん！　ボケてて月が全然見えねえよ！」
父「あわてなさんな慌てなさんな」
炭山「月が見えなくなっちまったらどうするんだよ」
母「月はなくならないわよ」
父「いや、そうとも限らないぞ母さん。月は毎年３センチずつ地球から遠ざかっているんだ」
炭山「え、そうなの！」
父「そうだぞー」
炭山「じゃあ、父さんが月に行く時より、僕が行く時のほうが遠いんだね！」
父「そうだな。よし。じゃあ、ピントを合わせるか！」
炭山「ピントって何？」
父「レンズとレンズの間の長さを大きくしたり小さくしたりするんだ。それで一番いい時に、お月様が綺麗に見えるって事さ」
炭山「へぇー難しいな」
父「そうだ。うまいことやんないと、綺麗なものもちゃんと見えないんだぞ」
炭山「よくわかんねえや」
父「よし、ピントが合った」
炭山「かして！　ほんとだ！　すげー！　デコボコまで見える！」
母「よかったわねえ」
炭山「姉ちゃん！　姉ちゃん！　あれ？　姉ちゃんは？」
母「はしゃぎ疲れちゃったみたいで寝ちゃった」
炭山「えーなんだよー。一緒にみるって言ったのに」
父「すごいはしゃぎっぷりだったもんな」

母「ええ、私があいつを月に連れて行ってやるんだーって家じゅう走り回って」
炭山「もったいねえよ。せっかく綺麗なお月様が見えてるのに」
母「また見ればいいわよ。月は毎日のぼってくるんだから」
父「そうだな。いつでも見れるのがお月様のいいところだ」
炭山「えー。すげえ綺麗なのに。僕、起こしに行ってくる！」
母「ちょっと」

炭山、走り出す。

炭山「姉ちゃん！　姉ちゃん！」

監督出てくる。他の人たちはける。
※（かっこ内）が監督のセリフ

炭山「姉ちゃん！（炭山）　姉ちゃん！（炭山）　早く一緒に見ようぜ。一緒に見るって約束だったじゃんかよ。父さんがピント合わせてくれたんだ。お月様が綺麗に見えるんだぜ。姉ちゃん見てよ。月には海が広がってるんだ。（その海は死の海なんだ）その海の中では何百年も何千年も前からの夢が転がってるんだ。（そこにいるのは亡霊たちだ）月の海の中でただひたすらに陸に上がるのを待っているんだ。望遠鏡でこうやって見てると月はすぐそこにあるような気がする。でも届かない。こうやって手を伸ばすと、そこにあるのにどっかいっちまうんだ。そこにあるのは月の亡霊だ。姉ちゃん。どこにいるんだ？（兎は死んだ！）見えなくなっちまうぞ。（死んだんだ）月はただでさえ遠いのに年に3センチずつ遠くなってるんだって。いや、距離なんて関係ないさ。どんなに距離が離れたって、俺の月に行きたいというこの夢が変わることはない。（違う。その距離はいずれ何もかもを断絶するんだ）姉ちゃんもそうだろ。月の兎さんに地球は綺麗ですかって聞くんだろ。（炭山。兎は死んだんだ）昔ある兎が老人を助けるために業火の中へ飛び込んだそうだ。その行いを見た神様は兎を月に登らせたらしい。あ、もしかして姉ちゃん、あの神話を信じちまったのか。さてはもう月へと行っちまったな？（違う！　兎は死んだんだ！）死んでなんかない！　姉ちゃんは月へと行っちまったんだ。業火の中へ飛び込み月へと登って行ったんだ。いっつもそうだ。姉ちゃんはいっつも先に行っちまう。追っかけてくのだって大変なんだぜ。よーしわかった。待ってろ。すぐに追いついてやるさ。しってるか。ロケットは世界で一番はやいんだ。姉ちゃんがどんだけ先に行っちまってもすぐに追いついてやる。ヒューストン。ヒューストン。（やめろ）こちらアポロ１１号。（お前はアポロではない！）搭乗準備完了。あとは打ち上げを待つのみです。（現実を受け入れろ炭山。お前はアポロではないんだ！）違う！　姿形がアポロなんじゃない。月へと登るその思いがアポロなんだ。この月へと登る一本の縄がある限り、俺はアポロであり続けるんだ。姉ちゃん。これはカンダタの蜘蛛の糸なのか。姉ちゃんが月の海から垂らしてくれているのか。そうだとしたら足元に蠢く蟹の亡霊たちよ、いくらでもついてこい。お前たちを引き連れてこのアポロは月へと行ってやるぞ。３。カウントダウンが始まった。この３秒は人類の歴史でもっとも価値のある３秒だ。２。俺が姉ちゃんを超える３秒だ。今度は姉ちゃんが俺の背中を見るんだ。１。姉ちゃん待ってろ。今、行くぞ！」

監督、自害（大爆発が起こる）。それと同時に炭山も倒れる。
炭山が倒れている。
人類の進化を身体表現。
音響のノイズが入る。
炭山「ヒューストン、ヒューストン。聞こえますか」
炭山「ヒューストン、ヒューストン。こちらアポロ１１号。聞こえますか」
炭山「ヒューストン、ヒューストン。応答ねがいます」

ノイズ

炭山「ヒューストン。ヒューストン。聞こえますか？」
白兎「はい。こちら、ヒューストン」
炭山「ヒューストン。こちらアポロ１１号。聞こえていますか？」
白兎「こちらヒューストン。アポロ１１号。聞こえていますよ？」
炭山「こちらアポロ１１号。神無月の２０日、午前５時１７分、表面温度摂氏20度、大気圧10^{-9}Pa、予測値通り、異常ありません。月への着陸に成功しました。僕は今、月にいます」
白兎「こちらヒューストン。アポロ１１号おめでとう。月の感触はどうですか？」
炭山「こちらアポロ１１号。月は少しやわらかく、平原のようです」
白兎「アポロ１１号。何が見えますか？」
炭山「ヒューストン。兎が見えます。地平線まで広がる大平原の向こうに、白い兎が飛び跳ねています！」

音楽

（完）